タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第二誦品

真理勝者の救済計画

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第二顕品

真理勝者の救済計画

序

『タターガタ・アビダンマ』の第一誦品は、大変な反響を呼んだ。というのは、これまでこれだけ明解に、そしてしかも詳しく、宇宙の構造や、あるいはサキャ神賢の説いた法の内容を説き明かしたわかりやすい本が、この日本に出版されなかったからである。

現代の日本は、高度な物質文明によって、わたしたちを楽しませてくれている。しかし、その楽しみは、生まれ、そして死という期間の間だけの無常の楽しみであり、しかも、わたしたちがその物質文明を肯定し、その中に心のよ

りどころを見いだそうとすればするほど、それは逆に、虚無的な心の状態をつくり出すのである。

この物質文明の発展そのものは、決して悪いことではない。わたしたちがもし、この物質文明の発展とともに、心の発達、心の成熟をすることができるならば、それは最高の神々ともいえる世界の喜びを、まさに経験しているということになるであろう。

この心の成熟に欠くことのできない状態、状態の解説、それが解脱である。よって、この『タターガタ・アビダンマ』第二弾では、魂を解脱に導く真理勝者の救済計画や、あるいは真理の――ここで真理という言葉が使われているのは、もともとサキャ神賢は、サキャ神賢の生存中「仏教」という言葉は一度も使っていない。よって、真理という言

葉を使わしていただく——真理の説き示す解脱へ至るプロセスについて、徹底的に検討してみたいと思う。

この一冊が、迷妄に苦しむすべての魂の道しるべとなり、すべての魂が真に幸福な、自由な、そして平安な境地を得ますように。

一九九一年十一月二日

麻原彰晃

目次

タターガタ・アビダンマ

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第二講品
真理勝者の救済計画

●序 3

❖ 第一章 生命体のステージ 22

一、十三段階の救済計画 22

●救済計画 23

●四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々 23

●真理の流れに入ること 23

●向と果報——24
●愛欲界に一度だけ再生すること——24
●不還——26
●供養値魂の果報——26
●現世大煩悩破壊——27
●大完全煩悩破壊——27
●中完全煩悩破壊——27
●減少完全煩悩破壊——28
●経験の構成がない完全煩悩破壊——28
●経験の構成がある完全煩悩破壊——29
●上流となり、超越童子天へ至る——29
●愛欲界に一度だけ再生する魂——30
●一種者——30
●徳の高い家から家へと転生する者——30

●最高七回流転者——31
●法則に従う者——31
●信に従う者——32
●帰依信男女——33
●普通の人と外道——33
●大完全煩悩破壊の意義——34
二、解脱へ到達するための三つの魂——37
●解脱へ到達するための三つの魂のタイプ——37
●到達真智運命魂——37
●独覚——38
●向煩悩滅尽多学男女——38
三、十の能力者——39

● 供養値魂のステージ——39
● 供養値魂——40
● 最上正覚者——40
● 智徳成就者——41
● 最上善逝——41
● 世間解——42
● 無上士——42
● 丈夫調御者——43
● 天人師——43
● 覚者——44
● 世尊——44
四、真理勝者——46
● 真理勝者——46

●真理勝者に至るための五つの能力——46
●信の能力——47
●人間の世界からの確信——48
●慚愧の能力——52
●良心の能力——53
●精進の能力——54
●智慧の能力——55
●真理勝者に至る五つの条件——55

❖ 第二章　世尊の定義——58

一、世尊の定義——58
●世尊の定義——58

●真理勝者と世尊 59
二、十の真理勝者の能力 60
●十の真理勝者の能力 60
●神聖天の輪 60
●原因と結果を見抜く能力 60
●要素の蓄積の結果を理解する能力 61
●三界に至る方法を理解する能力 62
●三界を完全に経験し尽くす能力 63
●生命体の傾向を理解する能力 64
●他の深い意識状態を理解する能力 65
●瞑想の結果を理解する能力 66
●不純物・洗い清め・出罪の瞑想 68
●静慮、離解脱 68
69

● 宿命通の能力 …… 70
● 死生智の能力 …… 72
● 漏尽通の能力 …… 74

三、四つの完全な自信 …… 76

● 最上正覚についての完全な自信 …… 76
● 漏の破壊についての完全な自信 …… 77
● 障礙の法則についての完全な自信 …… 78
● 法則についての完全な自信 …… 79

四、四つの分析 …… 81

● 四つの分析 …… 81
● 精通に至る四つのパート …… 85
● 意義の分析 …… 88

●意義の分析のための五つのカテゴリー——89
●法則の分析——90
●修行者の生き方の細分化——91
●苦しみの精通——92
●原因の精通——94
●再生の法則の精通——95
●老死の精通——97
●条件の生起の精通——98
●経験の構成の精通——99
●向煩悩滅尽多学男の条件——100
●話の意義の理解——102
●五感の精通——102
●精通による分別——104
●言葉による検討の分析——104

●神聖な言葉による分析 106
●瞑想して発される言葉 108
●会得の分析 109
●真理勝者の四つの分析 111
五、六つの証智 112
●六つの証智 112
六、六つの覚者の法則 113
●六つの覚者の法則 113
●身の精通 113
●言葉の精通 114
●意識の精通 115
●過去における覚者世尊の精通 115

●未来における覚者世尊の精通 116
●現在における覚者世尊の精通 116

第二章　解脱への道程 119

一、四つの修行 120
●真理の魂が実践しなければならない四つの修行 120
●善にのっとった修行 120
●功徳にのっとった修行 121
●寂静にのっとった修行 122
●法則にのっとった修行 122

二、十のきずな 124

●十の転生の条件 124
●三つのきずな 124
●有身嚩見 125
●疑念 125
●戒誓のとらわれ 126
●五つの下位に結びつけるきずな 126
●愛欲の興奮 127
●害心 127
●五つの下位に結びつけるきずなと転生 127
●五つの上位に結びつけるきずな 129
●形状愛著 130
●非形状愛著 130
●慢 130
●興奮 132

●非神秘力 132
三、解脱へ至る四つの実践 133
●向煩悩滅尽多学男が解脱へ至る四つの実践 133
●証智 133
●五つのとらわれの集積 134
●形状・容姿のとらわれの集積 134
●感覚のとらわれの集積 135
●表象のとらわれの集積 136
●経験の構成のとらわれの集積 137
●識別のとらわれの集積 139
●五つのとらわれの集積に対する証智 140
●捨断 140
●非神秘力 141

● 生存渇愛 …… 142
● 現証 …… 143
● 神秘力 …… 143
● 離解脱 …… 144
● 修習 …… 145
● 寂止 …… 145
● 正観 …… 146
● 大完全煩悩破壊界へ至る四つの実践 …… 148

四、覚者の段階 …… 149

● 覚者の段階 …… 149
● 現世否定 …… 149
● 離愛者 …… 150
● 滅尽 …… 151

●寂静 151
●証智 151
●正覚 151
●煩悩破壊 152

五、向煩悩滅尽多学男の五つの具足 154

●向煩悩滅尽多学男の五つの具足 154
●戒 154
●サマディ 154
●智慧 155
●離解脱 155
●離解脱精通見解 155
言語対比表 156
索引 158
参考資料 175
184

第一章

生命体のステージ

一、十二段階の救済計画

◉救済計画

救済計画とは、一般にいわれている病苦からの解放だとか、あるいは経済的に豊かになるだとか、そのようなことを表わしているのではない。魂を本質的に救済するということを表わしているのである

では、本質的に救済するとは何であろうか。それは、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つが存在する世界へといざなうということなのである　そして、そのためには十二段階の救済計画があるのである。

◉四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々

それでは、十三段階の救済計画について説明しよう。これらは、四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々を、より詳細に分類したものである。

ではまず、四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々のそれぞれが、どの段階に含まれるのかを説明しよう。

◉真理の流れに入ること

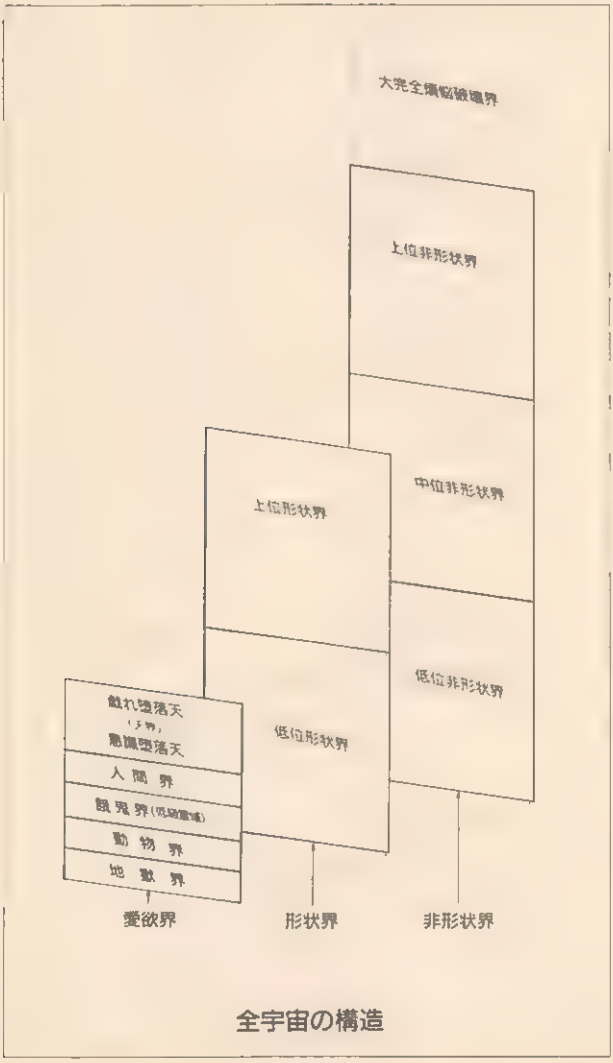
十二段階の魂のうち、まず、信に従う者から徳の高い家から家へと転生する者までが、「真理の流れに入ることに向かう段階」に当たる。そして、次の一種者は、「真理の流れに入る果報」であり、同時に「愛欲界に一度だけ再生することに向かう段階」に当たる。

◉向と果報

ここで、向と果報についての定義ということになるわけだが、向というのは、まだ向かってはいるんだけれど固定されてはいない、果報というのは、もう固定された状態なのである。例えば、「不還の果報」といった場合は、その人はもう形状界からは落ちない。そして、供養値魂に向かっているのである

◉愛欲界に一度だけ再生すること

一種者と同様に、愛欲界に一度だけ再生するステージは、「愛欲界に一度だけ再生する果報」であり、それと同時に「不還に向かう段階」となる。つまり、一回愛欲界に転生して、その後はもう形状界に入ることができるわけだから、当然これは不還に向かっていることになるのである。


大完全煩悩破壊界
上位非形状界
中位非形状界
低位非形状界
上位形状界
低位形状界
離れ堕落天
（六欲）
意識堕落天
人間界
餓鬼界（低級霊域）
動物界
地獄界
愛欲界
形状界
非形状界

全宇宙の構造

◉不還

次の上流と経験の構成がある完全煩悩破壊のステージは、「不還に向かう段階」に当たるが、経験の構成がない完全煩悩破壊のステージは、「不還の果報」であると同時に、「供養値魂に向かう段階」に当たる。この経験の構成がない完全煩悩破壊については、修行をしないで非形状界に入るわけだから、「供養値魂に向かう段階」といえるのである。

◉供養値魂の果報

そして、滅少完全煩悩破壊から現世大煩悩破壊までの四つのステージが、「供養値魂の果報」に相当するのである。

◉現世大煩悩破壊

次に、十二段階の魂について一つずつ説明しよう。

まず、最も高いステージ、これは現世大煩悩破壊である。これは、この現世にいながら、煩悩破壊界に完全に到達するということである。

◉大完全煩悩破壊

第二番目のステージは、大完全煩悩破壊である。これは、死の時に、その煩悩破壊に対する認識に到達するステージである。

◉中完全煩悩破壊

第三番目が、中完全煩悩破壊である。これは、死の直後に大完全煩悩破壊界へ到達するのではなく、死後中間状態において、バルドーにおいて、大完全煩悩破壊界へ到達するのである。

◉減少完全煩悩破壊

第四番目が、減少完全煩悩破壊である。この減少完全煩悩破壊は、死後中間状態に入り、いったん煩悩を減少させ、意識を移し変え、例えば、人間世界のバルドーから、神聖世界へ入り、その入った直後に煩悩破壊し、大完全煩悩破壊するということである。

◉経験の構成がない完全煩悩破壊

次は、形状界にて経験の構成がなく、功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊である　これは、どういうことかというと、形状界へと魂は転生するわけだが、その転生した先で、もともと功徳優位の状態なるがゆえに、大完全煩悩破壊できない。しかし、その功徳優位の経験が、功徳を使い果たし、終わりになるころ、その功徳の力が弱まり、そこから大完全煩悩破壊するという意味である

◉経験の構成がある完全煩悩破壊

次は、形状界にて経験の構成があり、真理の実践によって完全煩悩破壊する魂である。この魂は、形状界へ至る条件は備えているが、そこから完全煩悩破壊するというカルマを有していない。したがって、形状界へ至り、形状界で身・口・意の善行をなし、そこで完全煩悩破壊の種子を積み、そこから大完全煩悩破壊するということである。

◉上流となり、超越童子天へ至る

次は、上流となり、形状界に入り、超越童子天へ至るという魂である。これはどういうことかというと、功徳にのっとった修行、善にのっとった修行について精通した魂が、輪廻転生する。そして、神聖天界から徐々に徐々に高い形状界の天へ至り、最終的に形状界の最終天界である、超越童子天へと至るということである。そして、この流れを上流という。つまり、下の世界から、上の世界へと

流れるように転生し続けるということである。

◉愛欲界に一度だけ再生する魂

次の魂は、愛欲界に一度だけ再生する魂ということである。これは、第四天界である除冷淡天に一度だけ転生し、形状界へと至るのである。

◉一種者

次は、一種者である。この一種者とは、一度だけ人間の世界に転生し、形状界へと至るという意味である。

◉徳の高い家から家へと転生する者

次は、徳の高い魂が家から家へと転生するというステージである。これは、この人間の世界に転生し、二、三の裕福な家を流転してから、形状界へと至るとい

うことである。

◉最高七回流転者

次は、最高七回流転者である。この最高七回流転者は、最高七回まで、天界とこの人間の世界を流転してから、形状界へと至る魂である。

◉法則に従う者

次は、法則に従う者である。これは、いろいろな他の煩悩は煩悩として、滅尽することはできないが、真理の法則を生活の一部として実践している者である。したがって、その生の影響がもろに次の生に現われる魂である。例えば、その生において、善行を積めば天界へ行くし、天界で悪業を積めば、例えば地獄界へ落ちると。

では、この法則に従う者と、普通の人とではどう違うのであろうか。普通の人

は、いろいろなカルマの働きがあるから、例えば来世、今生なしたカルマによって、来世が決定されるとは限らないのである。例えば、それは前々生や、あるいは、百生、千生前のカルマによって、来世が決定される場合もある。しかし、法則に従う者は、その生ある程度の仏教的修行を積んでいるから、過去世のカルマを捨断することができる。よって、その生が次の生に、もろに影響を与えるということである。

◉信に従う者

そして最後は、信に従う者である。これは、教えの中身はよく理解していないのだが、ただ、教団を信じている、あるいはただ三宝を信じている、あるいはただ覚者を信じているという魂である。この魂もいずれ、その教えを少しずつ少しずつ理解し、上位十二の段階のどれかへと移行していくのである。これが、真理体系の十三のパターンなのである。

◉帰依信男女

ここで、帰依信男、帰依信女について触れておかなければならない。

この帰依信男、帰依信女とは、もともと真理勝者の在家の弟子で、一生懸命法を学び、実践している魂を指す。つまり、真理勝者が現われて、その真理勝者に対して信は持っているのだが、あまり実践しない魂も当然存在するのである。そうではなくて、信を持ち、しっかりとその教えを実践している在家の信者、これが帰依信男であり、帰依信女なのである。

◉普通の人と外道

ところで、この十二番目の下に、何が存在しているのか。それは、普通の人と外道なのである。

◉大完全煩悩破壊の意義

ところで、この初めだけなぜ大完全煩悩破壊でないのか、つまりなぜ現世大煩悩破壊なのかについて説明をしなければならない。これは、大変重要なことである。

もし、一番目が、現世大完全煩悩破壊だとするならば、人間の世界に生存するだろうかということなのである。つまり、現世大煩悩破壊とは、わざわざ人間として生きていくための、生存するための煩悩を残した状態で生き続けている、しかし、ほとんどの煩悩は止滅しているということを表わすのである　まさにサキャ神賢がこれだったのである。

では、なぜ五番目の経験の構成がない完全煩悩破壊において、同じように大完全煩悩破壊できないのか。これは、この魂は徳は徳として、喜びとして感じている魂なのである。よって、この徳が尽きるまでは、大完全煩悩破壊しないのである。つまり、ある程度の煩悩が破壊された状態で、徳を形状界において楽しんで

現世大煩悩破壊	供養値魂の 果　報
大完全煩悩破壊	
中完全煩悩破壊	
減少完全煩悩破壊	
形状界にて経験の構成がなく、 功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊	供養値魂に向かう段階 不還の果報
形状界にて経験の構成があり、 真理の実践による完全煩悩破壊	不還に向かう段階
上流となり、超越童子天へ至る魂	
愛欲界に一度だけ再生する魂	不還に向かう段階 [illegible] 真理の流れに入る果報
一種者	
徳の高い家から家へと転生する者	真理の流れに入る ことに向かう段階
最高七回流転者	
法則に従う者	
信に従う者	

十三段階の救済計画

いる魂ということになるのである　そして、最終段階で、大元全煩悩破壊するのである。

二、解脱へ到達するための三つの魂

◉解脱へ到達するための三つの魂のタイプ

解脱へ到達するためには、三つの魂のタイプがある　それは、到達真智運命魂、独覚、多学の向煩悩滅尽多学男女の三つである

◉到達真智運命魂

まず、到達真智運命魂とは、生というものを修行の場と考え、そして自分自身で真理勝者の教えや、あるいは経典の教えを体現しながら、生を繰り返し繰り返し行ない、それによって、大いなる善にのっとった修行、大いなる功徳にのっとった修行、大いなる寂静にのっとった修行、大いなる法則にのっとった修行を行ない、輪廻転生を続け、最終的には真理勝者となる魂である

◉独覚

次は独覚である。独覚とは、経典をもとにその教えを実践し、煩悩破壊するが、その教えを広めることがない魂のことである。

◉向煩悩滅尽多学男女

では、多学の向煩悩滅尽多学男女とは、どのような魂であろうか　これは、真理勝者が登場したとき、そこで真理勝者の教えを多く学び、そして煩悩破壊に向かっている魂ということになる。

三、十の能力者

◉供養値魂のステージ

次は、供養値魂のステージということになる。この供養値魂のステージを南伝仏教においては、「十の能力者」という言葉で表現している。では、この十の能力者とは、どのようなものであろうか。

まず、その言葉から検討しよう。供養値魂、最上正覚者、智徳成就者、最上善逝、世間解、無上士、丈夫調御者、天人師、覚者、世尊、これが十の能力者の十の名前である。そしてこれは、供養値魂からスタートし、世尊ですべてを終了するのである。

では、供養値魂から世尊までの内容について検討しよう

◉供養値魂

供養値魂とは、光を絶えず放つ者を指している　そして、この供養値魂に対して、布施、奉仕、あるいは教えの実践等を行なった者たちは、その果報を供養値魂の力によって得ることができる　つまり、供養値魂でない者を供養しても仕方がないが、供養値魂を供養することこそが最も最高の供養であり、最も功徳の辺りの早い供養なのである。

◉最上正覚者

第二段階の最上正覚者とは何であろうか　これは、これ以上にない正しい現象における理解をした者ということになる　つまり、この供養値魂の段階では、いろいろな認識における差があるのである　しかし、その次の段階、最上正覚者に入ると、認識においては全く一致する　これ以上の認識は存在しないという認識まで、認識を得るようになるのである。

◉智徳成就者

第三番目は智徳成就者である。この智徳成就者とは、この三界において智慧、あるいは徳が完全に成就した状態である。この智慧の成就とは、一切の現象を完全に把握し理解している状態、徳の成就とは、一切の願望をかなえることのできる状態ということになる。これが第三番目の智徳成就者の状態である。

◉最上善逝

次は最上善逝である。最上善逝とは、これ以上高い世界に転生することはない状態に到達した者ということである。これは、三界の構造を見ていただいたら、真理勝者が超越童子天を貫き、四非形状界を貫き、その上に認知経験滅尽という最終段階に到達していることがおわかりになるであろう。つまり、これ以上のものは存在しないのである。これ以上の存在も存在しないのである。

◉世間解

次は世間解である。世間解とは、世の中の一切の現象を完全に理解した状態ということになる。それは、物理、化学、数学、天文学、生物、医学、政治、経済、法律、哲学、宗教、歴史、言語、文学、心理学、音楽、美術、他の芸術等、すべてを完全に理解している者ということになる。

◉無上士

次は無上士である。無上士とは、これ以上の魂は存在しないということなのである。つまり、それは王を超越し、あるいはすべての宗教家を超越し、すべての政治家を超越した魂ということなのである。

◉丈夫調御者

次は丈夫調御者である。この丈夫調御者とは、迷妄に悩む現実主義の普通の人を、法則によりしっかりと調御し、そして、ちょうど暗闇に明かりを灯すように真理の現象を正しく指し示し、そして一つの方向、つまり上流、煩悩破壊へと至らしめることのできる魂ということを表わしているのである。

◉天人師

そして、天人師である。この天人師とは、実際にこの肉体を有し、あるいは化身によって天界へと至り、そして天の神々に対して法則を指し示し、天の神々を教え示すことのできる魂のことなのである。

◉覚者

そして、覚者である。この覚者とは完璧な六神通を有してる者ということになる。この六神通については、『タターガタ・アビダンマ 第一輯』を見ていただきたい。

◉世尊

そして、最終段階で世尊なのである。世尊とは、この世の中で最も尊ばれる魂ということになる。

これらの順番で力が充実し、そして供養値魂から世尊へと至っていくのである

供養値魂
最上正覚者
智徳成就者
最上善逝
世間解
無上士
丈夫調御者
天人師
覚　者
世　尊

十の能力者

四、真理勝者

◉真理勝者

では、真理勝者とは何かというと、真理勝者とは一切のグル、つまり師なしに最終の解脱へ到達した魂ということになる。

◉真理勝者に至るための五つの能力

この真理勝者の五つの能力は、真理勝者に至るための五つの能力ということである。つまり、第二章で述べる真理勝者の十の能力は、真理勝者に到達してからの十の能力であり、この五つの能力は到達する前の真理勝者の条件ということになる。では、それを一つずつ検討してみよう

◉信の能力

まず、信である。

この信は、この人間の世界が無常であり、そして苦しみの集まりであることから始まる。これがなぜ苦しみの集まりかというと、人間世界より上の愛欲神の世界から見ても、この人間世界は苦しみの集まりであり、もちろん神聖世界や、あるいは神聖世界が存在する形状界の最上位である超越童子天の世界と比較するならば、それはこの世界というのは、本当に糞だめの中と表現せざるを得ないのである。

では、なぜそれをわたしは糞だめといえるのだろうか。これは、『パーヤーシ経』をまず見てみよう。

◉人間の世界からの確信

「主権を有する者よ、それでは、あなたにたとえ話をしましょう　たとえによって同様に、この世において識者である、ある男たちは、話の意義を解釈するものです

主権を有する者よ、例として、野外便所に頭その他もろもろがもくった男がいたとしましょう、

それで、あなたは下男たちに命令を出します。

「それじゃあ友よ、その男をその野外便所から引き上げなさい」

「わかりました。」

と、彼らは承諾し、その男をその野外便所から引き上げるでしょう　あなたは彼らにこのように話しかけます。

「それじゃあ友よ、その男の身体から、種々の竹べらで糞を正しく取り払って綺麗にしなさい」

「わかりました。」

と、彼らは承諾し、その男の身体から、種々の竹べらで糞を正しく取り払って綺麗にするでしょう

あなたは彼らにこのように話しかけます。

「それじゃあ友よ、その男の身体に、三回黄色い粘土を正しく塗りつけなさい」

彼らはその男の身体に、三回黄色い粘土を出して、へたへたと塗りつけるでしょう　あなたは彼らにこのように話しかけます。

「それじゃあ友よ、その男に油を塗り、微細な粉末で三回十分に洗浄しなさい」

彼らはその男に油を塗り、微細な粉末で三回十分に洗浄するでしょう　あなたは彼らにこのように話しかけます。

「それじゃあ友よ、その男の髪とあご髭を装いなさい」

彼らはその男の髪とあご髭を装うでしょう　あなたは彼らにこのように話しかけます

「それじゃあ友よ、その男に大変高価な花飾りと大変高価な化粧品と大変高価な衣服を提供しなさい」

彼らは、その男に大変高価な花飾りと大変高価な化粧品と大変高価な衣服を提供するでしょう

あなたは彼らにこのように話しかけます。

「それじゃあ友よ、その男を宮殿に昇殿させ、五つの愛欲の構成部分を充足させなさい」

彼らはその男を宮殿に昇殿させ、五つの愛欲の構成部分を充足させるでしょう

「王権を有する者よ、これについてどう思いますか　王として扱われ、王として油を注いで清められ、髪と髭を装われ、花飾りの装飾品を身につけ、白い衣服を着て、宮殿の華麗な最上部に登り、五つ

の愛欲の構成部分をあてがわれ、維持し、感覚を満足させている人が、まさに再びその野外便所にもぐろうとするでしょうか。」

「尊者カッサパよ、なるほどそれはありません。」

「これはどうしてですか。」

「尊者カッサパよ、野外便所は不浄で、不浄であり、不浄であると思われ、悪い香りがあり、悪い香りがあると思われ、卑しむべきであり、卑しむべきであると思われ、厭逆であり、厭逆であると思われるからです。」

「王権を有する者よ、全く同様に、人々は愛欲神たちにとって、不浄であり、不浄であると思われ、悪い香りがあり、悪い香りがあると思われ、卑しむべきであり、卑しむべきであると思われ、厭逆であり、厭逆であると思われるのです　王権を有する者よ、人々の香りは、愛欲神の所に実に百ヨージャナ運び去られているのです。

さて、あなたの友や友人や親族や親類たちは、殺生が自制され、窃盗が自制され、愛欲における邪悪な行為が自制され、虚言が自制され、中傷が自制され、悪口が自制され、軽薄語が自制され、渇望がなく、害した心がなく、正見解がありますが、身体が破壊し、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生して、

『これゆえに同様に、高い世界はあり、随意の再生をする種々の生命体はあり、善と罪深い行為の要素の蓄積の果報と結果はある』と、こちらに来て告げることに何の意味があるでしょうか

王権を有する者よ、実に同様に、この教訓によって、

『これゆえに同様に、高い世界はあり、随意の再生をする種々の生命体はあり、善と罪深い行為の要素の蓄積の果報と結果はある』と、あなたはこのようになりなさい」

この経に書かれてる内容でもわかるとおり、つまり、この人間世界というのは、神々の世界から見たら明らかに糞だめなのである。

よって、真理勝者は第一番目に、まずこの人間の世界は無常であるから、絶対的な世界が存在するということを確信する。この確信こそが信である。そして、その確信を現実に体現していくこと、これが真理勝者の人生なのである。つまり、目的に対する確信なくして結果は得られないということなのである。

◉慚愧の能力

第二番目は慚愧である。

この慚と愧とは、外側に対してと内側に対しての心の働きを表わしている　ては、慚とは何であろうか　これは、自分自身のなした過ちを外側に対して告白するということを意味し、愧とは、自分のなした過ちを内側で反省することを表わしているのである。

そして、この慚愧は、その人の心を寂静にしていく　つまり、心を静めていくわけである　これらによって、諸現象を正確に見る力がついてくる

よって、二番目になぜ慚愧が来るかというと、諸現象を正確に見ることができなければ、結局この現象界の実体を理解することができないからである　現象界の実体を理解することができないということは、この現象界に惑わされてしまうということなのである。

逆に、慚愧の念が生じていれば、この現象界が実は苦しみの集まりであること

をしっかりと理解でき、そして、より高い世界を考察することができ、そこへ向かうことができるのである。

◉良心の能力

第二の真理勝者に至る能力は良心である

この良心とは何か　それは、すべての魂に対して本当に幸福になってもらいたいと思う心である。一番目に存在している慚愧が、消極的な状態を表わすのに対し、この良心は積極的な善を表わしている

そして、この良心というのは、二つのカテゴリーに分類できる　それは、徳と善である。この徳とは、自分よりステージの高い者に対する、つまり霊性の高い者、心の成熟している者に対する良い心を表わし、善とは、自分と同等の者、あるいは自分より下の者に対しての良い心を表わしているのである

◉精進の能力

第四番目は精進である。漢訳では、「奮闘努力」と「精進」が誤解されているわけだが、ここでいう「精進」とはひたすら目的に向かって突き進むことを表わしている。つまり、決して妥協を許さない心の働き、これが精進なのである。

では、なぜこの精進が必要なのか。それは、いくらいい心があっても、あるいは慚愧の念があったとしても、その人が前向きに前進しないとするならば、決して結果は得られない。

例えば例を挙げるならば、信は目標設定を意味し、慚愧はそこへ至るための障害物を取り除くことを意味し、良心はそこへ至るための条件をクリアすることを意味する。しかし、そこへ到達するために必要なのは前進させよう、結果を出させようとする心の働きである。そして、それがこの精進なのである。

◉智慧の能力

そして、第五番目は智慧である。この智慧は、現象を正確に見つめることのできる力を表わしている。つまり、ここでいう智慧とは神秘的なものを指すのではなく、現象を正確に観察することのできる力を表わしているのである。

◉真理勝者に至る五つの条件

そして、これらの五つの条件が揃って、初めて真理勝者に至ることができるのである。

もう一度ここで復習しよう。まず信によって目的を定め、慚愧によって心を寂静にし、良心によって功徳を積み、精進によってその目的に対して邁進し、智慧によって一つ一つの現象を論理的にクリアする。そして、これら五つの条件がもしそろっているならば、いかなる大事業も達成できるのである。

第二章

世尊の定義

一、世尊の定義

◉世尊の定義

「十の真理勝者の能力」「四つの完全な自信」「四つの分析」「六つの証智」「六つの覚者の法則」、このすべての法則を完全に自分のものとし、内在している魂、これがバガヴァントである。

このバガヴァントとは、「世尊」と訳すことができる。つまり、この世において最も尊ばれる魂ということである。そして、この「この世において」という意味はどういうことかというと、これはこの人間界だけではなく、天界、形状界の神々、非形状界の神々のすべてを通して、最も尊ばれる魂ということなのである。

◉真理勝者と世尊

真理勝者と世尊の違いは、これは表と裏の違いということができる。では、どのように違うのであろうか。

つまり、真理勝者とはグルなしに、最上の悟りを得た者、十の能力を有している者という意味である。つまり、真理によって勝利した者ということなのである。

では、世尊とはどういう意味であろうか。これは、その十の能力を持つがゆえに、先程も述べたとおり、周り、つまりこの世界だけでなく、愛欲の天界、形状界、非形状界を通して、すべての魂がその真理勝者を尊ぶ、つまりこの三界すべての魂が尊敬する。よって世尊なのである。

二、十の真理勝者の能力

◉十の真理勝者の能力

では、世尊の定義を一つずつ説明していこう。

まず第一は、十の真理勝者の能力である。この十の真理勝者の能力については、少し難しくなるが、『大獅子吼経』の原文を入れて、それについて一つずつ解説することにしよう。

◉神聖天の輪

サーリプッタ（次に来る子供）よ、真理勝者にはこれらの十の真理勝者の能力があり、その能力を具足した真理勝者は、指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を回転させるのである。十とは何であろうか。

まず、この真理勝者が神聖天の輪を発生させるといっているわけであるが、これは明らかに、この十の能力によって神聖世界の輪、つまりサハスラーラ・チャクラを開くということをいっているのである。

では、その十の能力の説明に入ろう。

◉原因と結果を見抜く能力

サーリプッタよ、ここで真理勝者は、原因から道理を、原因でないことから道理でないことを如実に認識し理解する。サーリプッタよ、真理勝者が原因から道理を、原因でないことから道理でないことを如実に認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼をほえ、神聖天の輪を発生させるのである。

この第一番目の真理勝者の能力は、すべての現象の原因をしっかりと見つめ、

そして、その原因と結果を見抜く力があるということをいっているのである。つまり、ある現象が存在したとして、その現象の原因をしっかりとらえる。そして、結果がどうなるかを導き出す。逆に、その現象と関係のない原因というものは、決してとらえないのだということをいっているわけである。

◉要素の蓄積の結果を理解する能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は過去・未来・現在の要素の蓄積の記憶実践の結果を、道理により原因により如実に認識し理解する。サーリプッタよ、真理勝者が過去・未来・現在の要素の蓄積の記憶実践の結果を、道理により原因により如実に認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を発生させるのである

第二番目の真理勝者の能力は、この要素の蓄積の結果、つまり、わたしたちが

過去世においてなした、あるいは過去においてなした、身における行為の善業および悪業、言葉における善業および悪業、そして心における善業および悪業、これについて、また、現在の身における、行為における善業と悪業、言葉における善業と悪業、心における善業と悪業について、そして、未来に生じるであろう身における行為の善業と悪業、言葉の善業と悪業、心の善業と悪業について、その要素の蓄積の結果がどのような形で現われるかを、はっきりと完全な形で理解できるということをいっているのである。

◉三界に至る方法を理解する能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者はあらゆる場所に至る方法を如実に認識し理解する。サーリプッタよ、真理勝者があらゆる場所に至る方法を如実に認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を発生させるのである。

この三番目の「真理勝者はあらゆる場所に至る方法を如実に認識し理解する」、これはどういうことかというと、この愛欲界・形状界・非形状界、この三界のどこの世界へ行くためにはどのような修行をすればいいかということを、完全なはっきりとした形で理解しているということなのである。

◉三界を完全に経験し尽くす能力

サーリプッタよ、さらにまたさらに、真理勝者は多くの要素と様々な要素の世界を如実に認識し理解する。サーリプッタよ、真理勝者が多くの要素と様々な要素の世界を如実に認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼して吼え、神聖なる輪を発生させるのである。

そして、真理勝者は、この愛欲の世界、そして形状の世界、非形状の世界、これらの世界のすべてを完全に経験し尽くしているのである。

◉生命体の傾向を理解する能力

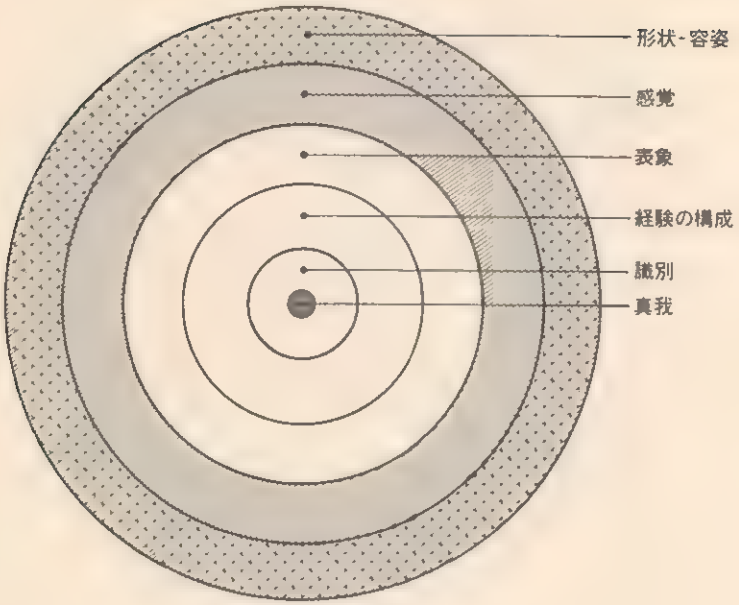
サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は種々の生命体の様々な傾向を如実に認識し理解する。サーリプッタよ、真理勝者が種々の生命体の様々な傾向を如実に認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼をなし、神聖な輪を転生させるのである。

これは、どのようなカルマによって、つまりどのような身・口・意の善業、悪業によって、どのような形状・容姿を有するのか、つまり、どのような形に生まれ変わるのかということを、真理勝者は、はっきりとした形で、完全な形で理解できるということをいっているのである。

◉他の深い意識状態を理解する能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は異なった生命体、異なった魂の潜在性以上を推し測ることを如実に認識し理解する。サーリプッタよ、真理勝者が異なった生命体、異なった魂の潜在性以上を推し測ることを如実に認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を発生させるのである。

これは、他心通と関係があるわけだが、真理勝者の六番目の能力としては、真理勝者以外の魂の潜在意識、本人が認められない、本人が理解できない深い意識状態を、真理勝者は、はっきりとした完全な形で理解できるのである。なぜならば、真理勝者の真我は心の本質をも超えたところに存在しているから、最も深い部分を真理勝者は理解できるわけなのである。



意識の構造

意識があるところによって、理解できる範囲は異なる。例えば、形状-容姿に意識があるとき（網点部分）よりも、感覚に意識があるとき（斜線部分）の方が、理解の範囲が広がることがわかる。そして、真我に到達した時点で、すべてが理解できるのである。

◉瞑想の結果を理解する能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は、静慮・瞑想・解脱・究竟のサマディ・生起のサマディの不純物・洗い清め・出罪を如実に認識し理解する　サーリプッタよ、真理勝者は静慮・瞑想・解脱・究竟のサマディ・生起のサマディの不純物・洗い清め・出罪を如実に認識し理解することゆえ、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は真理勝者の地位を公言し、集団の中で獅子吼し、梵輪を転ずるのである

この七番目は大変重要である　つまり、どのような瞑想を行なったら、どのような結果を招くかということをはっきりと理解しているわけである

◉不純物・洗い清め・出罪の瞑想

そして、この「不純物」「洗い清め」というのは、これは対比された概念である。つまり、瞑想には二つのタイプの瞑想があるのである

その第一のタイプは、煩悩を増大させる瞑想、例えば、ああなりたい、こうなりたいというような願望の瞑想、もう一つは、自己の今までなしてきたカルマを捨断する瞑想の二つである。そして、前者は不純物の瞑想といわれ、後者は洗い清めの瞑想といわれる。そして、その原因と結果をはっきり理解し、その原因を思索によって、もし捨断することができるならば、それは出罪の瞑想ということができるのである。

◉静慮、離解脱

ところで、この静慮、離解脱というのは、何を意味しているのか

この静慮というのは、四段階のサマディのことである。これは、タターカタ・アビダンマ第一冊目の「サマディ」の項を参照していただきたいて、離解脱については、これは完全に煩悩から自我が切り離された状態を表わしているのである。

そして、そこに到達するための二つのサマディのタイプが、究竟のサマディと生起のサマディなのである。そして、その究竟のサマディと生起のサマディにおいての正しい方法、これが洗い清めの方法であり、そして出罪の方法なのである。

◉宿命通の能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は様々な前世の生き様を思い出す　つまり、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元再生期を、

「わたしはそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった　そして、わたしはこれから死んで、そこに転生した。

わたしはそこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、わたしはこれから死んで、ここに転生した。」

と、このように状態を伴い説明を伴う、様々な前世の生き様を思い出す。

サーリプッタよ、真理勝者は様々な前世の生き様を思い出す　つまり、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元再生期を、

「わたしはそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、わたしはこれから死んで、そこに転生した。

わたしはそこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、わたしはこれから死んで、ここに転生した。」

と、このように状態を伴い説明を伴う、様々な前世の生き様を思い出すこと、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を発生させるのである

◉死生智の能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は、清浄であって人間を超越した天眼によって、種々の生命体が死に転生するのを見て、種々の生命体が業素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かったり悲痛に向かったりするのを正しく理解する。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身における悪行を具足し、語における悪行を具足し、意識における悪行を具足し、聖人を非難し、邪見解があり、邪見解の業素の蓄積の実践がある。彼らは身体が破壊して、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である苦悩地獄に転生した。

尊者よ、また確かに、これらの生命体は、身における善行を具足して、語における善行を具足して、意識における善行を具足して、聖人を非難することなく、正見解があって、正見解の業素の蓄積の実践がある。彼らは身体が破壊して、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した」

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、種々の生命体が死に転生するのを見て、種々の生命体が業素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを正しく理解する

サーリプッタよ、真理勝者は、清浄であって人間を超越した天眼によって、種々の生命体が死に転生するのを見て、種々の生命体が業素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かったり悲痛に向かったりするのを認識し理解する

「尊者よ、確かに、これら生命体は、身における悪行を具足し、言葉における悪行を具足し、意識における悪行を具足し、聖人を非難し、誤謬見解があり、誤謬見解の業素の蓄積の記憶実践がある彼らは身体が破壊し、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である数苦地獄に転生した。

尊者よ、また確かに、これら生命体は、身における善行を具足し、言葉における善行を具足し、意識における善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解があり、正見解の業素の蓄積の記憶実践がある　彼らは身体が破壊し、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した」

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、種々の生命体が死に転生するのを見て、種々の生命体が業素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かったり悲痛に向かったりするのを認識し理解すること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を発生させるのである

◉漏尽通の能力

サーリプッタよ、そしてまたさらに、真理勝者は、種々の漏を破壊することによって、無漏の心の離解脱や智慧の離解脱を、この世界において、自ら証智し現証し達成してとどまる。サーリプッタよ、真理勝者が、種々の漏を破壊することによって、無漏の心の離解脱や智慧の離解脱を、この世界において、自ら証智し現証し達成してとどまること、サーリプッタよ、これは真理勝者の真理勝者の能力であり、その能力のゆえに、真理勝者は指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖天の輪を発生させるのである。

この宿命通、死生智、漏尽通については、『タターガタ・アビダンマ 第一誦品』を参照していただきたい。

これが、十の真理勝者の能力なのである。しかし、これだけでは世尊には至らないのである。

原因と結果を見抜く能力
要素の蓄積の結果を理解する能力
三界に至る方法を理解する能力
三界を完全に経験し尽くす能力
生命体の傾向を理解する能力
他の深い意識状態を理解する能力
瞑想の結果を理解する能力
宿命通の能力
死生智の能力
漏尽通の能力

十の真理勝者の能力

三、四つの完全な自信

◉最上正覚についての完全な自信

サーリプッタよ、真理勝者には、これらの四つの完全な自信があり、その完全な自信を具足する真理勝者は、指導者の地位を公言し、集団の中で獅子吼してほえ、神聖なる輪を発生させるのである。四つとは何であろうか。

「最上正覚者であるとあなたは公言するが、これらの法則は現に覚されたものではない」と、そこで確かにわたしを、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖人やだれかが、世界において法則を示してとがめるということ、サーリプッタよ、この兆候をわたしは認めない。わたしは、この兆候を認めないので、安らぎに達し、安心に達し、完全な自信に達してとどまるのである」

次は、「四つの完全な自信」について説明をしよう

まず、最上正覚である。最上正覚とは、これより上のない最も正しい覚醒という意味なのである。そして、これはこの人間界だけではなく、愛欲神や、あるいは破滅天や、あるいは神聖天のいかなる魂も、この真理勝者の覚醒、正しい覚醒については非難できないということをいっているのである　それほどに完璧な覚醒なのである。

◉漏の破壊についての完全な自信

「漏が破壊されたとあなたは公言するが、これらの漏は完全に破壊されてはいない」と、そこで確かにわたしを、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天やだれもが、世界において法則を示してとがめるという、サーリプッタよ、この兆候をわたしは認めない　わたしは、この兆候を認めないで、安らぎに達し、安心に達し、完全な自信に達してとどまるのである

第二番目は、真理勝者の漏は破壊され、つまりエネルギーの漏れが全くないの

であって、だれもとがめることができないことを表わしているのである。このだれもというのは、先程述べたこの人間の世界、そして愛欲神、破滅天、神聖天のことである。

◉障礙の法則についての完全な自信

「障礙をもたらす法則がいわれたが、それを実践する者に、実に障礙があることはない。」と、そこで確かにわたしを、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天やだれもが、世界において法則を示してとがめるという、サーリプッタよ、この兆候をわたしは認めない。わたしは、この兆候を認めないで、安らぎに達し、安心に達し、完全な自信に達してとどまるのである。

三番目は、真理勝者が「これは障礙をもたらす法則である」と言う場合、いかなる人が、「いや、それを実践したとしても、それは障礙をもたらすものではないんだ」と言ったとしても、それは明らかに障礙をもたらすのだということをいっ

ているわけである。要するに、そうした非難はあり得ないのである。そして、これはこの世界だけではなく、愛欲神や破滅天や神聖天ですらも、その法則を壊すことができないことを表わしているのである。

◉法則についての完全な自信

「そのために法則が指し示されたが、それは、それをなす者を苦しみの破壊へと正しく輪廻から脱却させることがない。」

と、そこで確かにわたしを、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天やだれもが、世界において正しく非難するという、サーリプッタよ、この兆候をわたしは認めない。わたしは、この兆候を認めないで、安らぎに達し、安心に達し、完全な自信に達しとどまるのである。

まず、この「そのために法則が指し示されたが」というのは、「輪廻から脱却するための法則が指し示されたが」ということの省略である。そして、「その法

則によっては、輪廻から脱却できないんだ」という非難は、この世界の祭司やあるいは愛欲神や破滅天や神聖天も何人も否定できないのだということをいっているのである。

そして、これが四つの真理勝者の完全な自信なのである。

四、四つの分析

◉四つの分析

四組において、四つの分析は、まさしく意義などにおいて細分することに至った四つの精通なのである。そして、こう言われている。

「意義における精通は、意義の分析である。法則における精通は、法則の分析である。そこで、法則の言葉による説明の討論における精通は、言葉による説明の分析である。種々の精通における精通は、会得の分析なのである」と。

そこで、意義とは、要約すると、この原因の果報、業成物であるというのは、原因の果報は原因に一致して、移り変わり、習得され、納得させられるので、したがって意義といわれるのである。

そこで、細分することから、経験によって引き起こされることは何でも・涅槃・語の意義・結果・行動という、これらの五つの法則が意義であると理解しなければならない。ここで、これを考察することによって、その意義において細分することとなる精通が、意義の分析なのである。

法則とは、要約すると、この条件の象徴物である　というのは、条件はそれぞれのものを配置し、発生させ、達成することを与えるので、したがって、法則であるといわれるのである

さて、細分することから、果報が生じられたこと・原因・聖なる道・語の善・不善という、これら五つの法則が法則であると理解しなければならない　その法則を考察することによって、その法則において細分することに至った精通が、法則の分析である

まさにこの意義が、極めて大切な法則にある

「苦しみにおける精通は、意義の分析である　苦しみの生起における精通は、法則の分析である　原因における精通は、法則の分析である　原因の果報における精通は、意義の分析である　種々の法則が成立し、生まれ出て、実を結び、再生され、生じたが、これらの法則における精通は、法則の分析である　これらの法則から、種々の法則が成立し、生まれ出て、実を結び、存在するようになり、再生され、生じたが、これらの法則における精通は、法則の分析である　老死における精通は、意義の分析である　老死の生起における精通は、法則の分析である　老死の滅尽における精通は、意義の分析である　老死の滅尽に至る方法における精通は、法則の分析である」

出生における精通、生存における精通、とらわれにおける精通、渇愛における精通、感覚における

る精通、接触における精通、六つの感覚要素と対象における精通、心の要素、形状、容姿における精通、識別における精通、種々の経験の構成における精通は、意義の分析である　経験の構成の生起における精通は、法則の分析である　経験の構成の滅尽における精通は、意義の分析である　経験の構成の滅尽に至る方法における精通は、法則の分析である

ここで向煩悩滅尽多学男は、法則を、経・散文韻文混合経・回答・詩句・狂喜句・このように覚者はおっしゃられた」という経・輪廻転生談・格別な法則・聖典の寄せ集めをわかっている　これが、法則の分析といわれるのである　彼はまさに、それぞれの話の意義をわかっている　これが意義の分析といわれるのである。

どのような種々の法則が、善であるか

愛欲の領域である善の心を生じ、幸福と共にあり、精通に結びつき、形状・容姿の対象の固定があり、あるいは声の対象の固定があり、あるいは香りの対象の固定があり、あるいは味の対象の固定があり、あるいは接触の対象の固定があり、それぞれに着手するとき、そのとき、接触があり、……（略）……平穏がある。これらの法則が善である　これらの法則における精通が、法則の分析である。これらの結果における精通が、意義の分析である」

このように同様に、分別して実感させるのである

そこで、原則の言葉による検討の討論における精通とは、その意義と原則とにおける状況を有している言葉による検討であり、失敗のない定義の共通なやり方である。それが検討され、明かな、発せられるとき、その前、耳を利いたことと、発せられたことを聞き、「これは状態を有している言葉による検討である。これは状態を有している言葉による検討ではない」と、このような状況される原則の言葉による検討であり、状態を有している言葉による検討であるが、また、その符合する根本点であるが、かつ、太陽の祭司している、に属する言葉を細分することに等しい精通は、言葉による検討の分析である。

というのは、言葉による検討の分析を勝ち取った者は、「接触は、断定法」と、このような発言などを聞き、「これは状態を有している言葉による検討である」と同じく、また、「接触の断定法」と、このような発言はなくを聞き、「これは状態を有している言葉による検討ではない」と知るからである。

種々の精通における精通とは、あらゆる場所で精通を対象の固定となして、考察することによって、精通を対象の固定とする精通であり、あるいは前記のような、それらの精通における思索範囲の限定がなされるべきことなどを伴うことによって、詳細にという精通であり、分解の分析であるという意義である。

◉精通に至る四つのパート

真理勝者の四つの分析は、この「清浄の道」という経典の記述に沿って説明しよう。

四諦において、四つの分析は、まさしく意義などにおいて細分することによる四つの重要なものである。そして、こう言われている。

まず、分析には四つのパートがある　そして、その四つのパートの分析は、結果的にはその現象の意義、つまり現象の意味合い、この現象の意味合いを分析することによって精通に至るということが目的なのである　そして、この精通に至ることのできる魂が、真理勝者なのである

意義における精通は、意義の分析である　法則における精通は、法則の分析である

まず、意味合いを分析すること、つまり現象の意味合いを分析することは、現象の精通に通じる。

そして、法則の意味合い、大宇宙の法則の意味合いを分析すること、それは大宇宙の法則の精通に通じるのである。

この後者は、科学者の採っているスタンスと全く同じである　例えば、もし科学者が大宇宙の法則を分析しなければ、その法則に対して精通することはできない　これと同じように、もし真理の実践者が大宇宙の法則を分析することができなければ、その精通に到達しないということをいっているのである

そこで、法則の言葉による検討の討論における精通は、言葉による検討の分析である

そして、法則を言葉によって検討し、それを討論し精通に至るということは、結局それは、法則を言葉によって検討し、そして討論によって分析するということと同義語であるということをいっているのである

種々の精通における精通は、会得の分析なのである

そして、諸々の現象に対して精通するためには、それは諸々の達成されたもの、この達成されたものを分析することによって生じるということをいっているのである。

◉意義の分析

そこで、意義とは、要約すると、この原因の果報・集積物である。というのは、原因の果報は原因に一致して、移り変わり、習得され、納得させられるので、したがって意義といわれるのである。

ここで意義といっているのは、先程も述べたとおり、その現象の意味合いということになる。

そして、この現象の意味合いは、当然原因があり、その原因の果報を表わしていることはいうまでもない。ここでは、そこを説明しているのである。そして、この原因をしっかりと分析することができるならば、その原因の変化によって当然結果が変化する。また、原因が同じだとしても、途中の条件が変化したことによって当然結果は変化するということをいっているのである。

◉意義の分析のための五つのカテゴリー

さて、細分することから、経験によって引き起こされたことは何であり・煩悩破壊・話の意義・結果・行動といった、これら五つの法則が意義であると理解しなければならない。

つまり、ここで述べられている五つの現象――経験によって引き起こされたすべての現象が第一、二番目は煩悩破壊、三番目が話の意味合い、四番目が結果、五番目が行動――この五つのカテゴリーに、すべての現象の意味合いというものは、分類することができるのである。これは、それを述べているのである

ここで、それを考察することによって、その意義において細分することに至った精通が、意義の分析なのである。

そして、これら五つのカテゴリーにまず分析し、その一つ一つをより細かく検討する。より細かく検討することによって、その一つ一つの意味合いが、つまり、経験のすべて、煩悩破壊、言葉の意義、結果、行動、これらの五つの意味合いが正確に理解できるようになる。この正確に理解できるようになることを精通といっているのである。

◉法則の分析

法則とは、要約すると、この条件の象徴物である　というのは、条件はそれぞれのものを配置し、発生させ、達成することを与えるので、したがって、法則であるといわれるのである

これは、大変素晴らしい真理の法則だといえる、つまり、法則イコール条件であると、この教えはいっているのである。

では、なぜ法則イコール条件といえるのか。例えば、ここに種があったとして、

その種に対して、土の条件や養分の条件や水の条件、あるいは日光の条件、これらの条件がそろって、初めてこの種というのは、花になったり、あるいは木になったりするわけである　そして、この種が花や木になるのか、あるいは枯れてしまうのか、あるいは全く芽を出さないのか、それはすべてその法則、つまり条件で決まるということを考えれば、ここでいわれている内容がよく理解できよう。

◉修行者の生き方の細分化

さて、細分することから、果報が生じられたこと・原因・聖なる道・悪の善・不善という、これら五つの法則が法則であると理解しなければならない　その法則を考察することによって、その法則において細分することに至った精通か、法則の分析である

この細分されたこと、これは何を細分したのか　それは、仏道修行者の生き方を細分したということになるわけである。そうすると、まず果報が生じられたこ

と、そして原因、聖なる道、そして苦の善、それから不善、これらの五つについて徹底的に分析する　そして、徹底的に分析することによって精通が得られる　精通が得られることによって、そこから修正する　これが修行者の態度なのである

◉苦しみの精通

まさにこの意義が、極めて大切な法則である

苦しみにおける精通は、七種の分析である　苦しみの生起における精通は、七種の分析である　苦しみの滅尽における精通は、七種の分析である　苦しみの滅尽に導く道における精通は、七種の分析である

まさにこの現象の意味合いは、極めて大切な法則の中に存在しているのである

では、それを一つずつ説明することとしよう

第一番目、苦しみ　苦しみという現象の意味合い、これはその苦しみについての徹底的な分析によってのみ、その精通が生じる

例えば例を挙げるならば、人間が生まれる、生まれるということに対して、その変化を観察し、結局はそれは苦しみであると答えを出すわけであるか、その場合、その現象の真の意味合い、つまり生まれるということの真の意味合いを十二の条件生起の段階によってしっかり理解していないと、この生まれるということに対する最適は存在しない。つまり、第一番目の項目は、このようなパターンのことをいっているのである。

第一番目のパターンは、苦しみの生起　これは、まさに法則の分析をする必要がある　では、なぜ法則の分析をする必要があるのか　それは苦しみというものがそこに存在していて、それを生起、つまり働かせることもできれば、働かせないこともできる　そこにおいて存在するのは条件なのである

先程も述べたとおり、いくら種が存在していたとしても、その種が土に植えられていなかったり、養分が与えられていなかったり、水が与えられていなかったり、日光が与えられていなかったりするならば、当然それは種のままである　つ

まり、苦しみというものは存在しても、苦しみの生起は存在しない。

よって、この苦しみの生起、苦しみがどのようにして条件によって生じるのかというためには、その苦しみの生じる条件について分析をしなければならないということをいっているのである。

◉原因の精通

原因における精通は、法則の分析である　原因の果報における精通は、意義の分析である

次に出てくる「原因における精通は、法則の分析である」――これはどういうことかというと、例えばここに一個の種があったとして、この種がどうなるかというとは、法則、つまり条件の設定を変えて、初めて結果が得られるわけである。つまり、原因がいくらそこに存在していても、その後に来る条件というものが、もししっかりと分析されていなければ、結果は見られない。よって、原因におけ

る精通は、法則における精通といっているのである。

次は、結果における精通である。結果というのは、そこから先に現象を発展させないから、まず結果イコール現象の意義ということになる。この現象の意義をしっかりと分析すること、現象の意味合いをしっかりと分析すること、これによってのみ、その結果の精通が得られるのである。

◉再生の法則の精通

種々の法則が成立し、生まれ出て、実を結び、再生され、生じたが、これらの法則における精通は、法則の分析である。これらの法則から、種々の法則が成立し、生まれ出て、実を結び、存在するようになり、再生され、生じたが、これらの法則における精通は、法則の分析である

これらの条件によって変化している場合、当然これはその条件、つまり法則を分析することによって、その精通へ到達するということをいっているのである。

次の行も同じことをいっている。

つまり、この第一番目の「成立」――これはその生のカルマが終わり、次の生のカルマが完全に成立したことを意味している。

第二番目の「生まれ出る」――それは、その成立の段階から、次に条件生起の段階に従って動き出した状態を表わしている。

そして、第三番目の「実を結び」――「実を結び」というのは、実際に六つの感覚要素と対象における感覚が完全に生起し、渇愛、愛着のプロセスが成立していることを意味している。つまり、これはそのカルマの成立、カルマが成立した結果、次の生との結びつきが成立したことを意味しているのである。

そして、生存の世界へと再生され、そして生じることを意味しているのである。

当然、これらの流れは、その流れに対する分析によってのみ結果が得られるのである。

第二のパターンは、一つのものから次のものへ移行する――つまり第一番目の

パターンは、これは真我とニグナの干渉を表わしており、第二のパターンは、明らかに前生と次の生の関係を表わしているのである

◉老死の精通

老死における精通は、意義の分析にある　老死の生起における精通は、[illegible]　老死の滅尽における精通は、意義の分析である　老死の滅尽にする方法における精通は、[illegible]である

この部分は大変わかりやすい。つまり、老死という意味合い、現象の意味合い、これに精通するためには、その意味合いを分析すればいいということをいっているのである。

また、老死の滅尽という意味合い、現象の意味合い、これに精通するためにも、その現象の意味合いを分析すればいいといっているのである

同じように、老死の生起については、その老死が生起するに至る流れ、つまり条件、法則について分析することによって、老死について精通することができるといっているわけである。

同じように、老死の滅尽に至る方法についても、その滅尽に至る方法における法則、あるいは条件について分析することによって精通が生じるといっているのである。

◉条件の生起の精通

出生における精通、生存における精通、とらわれにおける精通、渇愛における精通、感覚における精通、接触における精通、六つの感覚要素と対象における精通、心の要素、形状、容姿における精通、識別における精通、種々の経験の構成における精通は、意義の分析である。

出生における精通、生存における精通、とらわれにおける精通、渇愛における

精通、感覚における精通、接触における精通、六つの感覚要素と対象における精通、心の要素・形状・容姿における精通、識別における精通、種々の経験の構成における精通――これらは、すべて現象の意味合いについて理解しなければならないから、当然この現象の意味合い、つまり意義について分析する必要がある　現象の意味合いについて分析する必要があるわけである　それによって精通が生じるのである。

◉経験の構成の精通

経験の構成の生起における精通は、法則の分析である　経験の構成の滅尽における精通は、意義の分析である　経験の構成の滅尽に至る方法における精通は、法則の分析である

経験の構成の生起における精通――つまり経験の構成が生起する、過去の経験が生起する、そのような条件、その条件が生起する法則、これを理解するために

は、当然その条件生起の分析をする必要がある。それによって、精通が生じるのである。

同じように、経験の構成の滅尽、これは経験の構成の滅尽という現象の意味合いをとらえなければならないから、当然現象の意味合いを分析しなければならない。それによって、精通が生じるということである。

経験の構成の滅尽に至る方法については、この滅尽に至る方法という条件、あるいは法則、これを分析することにより精通が生じるといっているのである。

◉向煩悩滅尽多学男の条件

ここで向煩悩滅尽多学男は、法則を、経・散文韻文混合経・回答・詩句・狂喜句・『このように覚者はおっしゃられた』という経・輪廻転生話・格別な法則・聖典の寄せ集めをわかっていて、これが、法則の分析といわれるのである。

そして、向煩悩滅尽多学男、つまりビックの条件とは何かというと、それはここに挙げられる九つのパターンのすべてに対して、しっかりとその法則を理解しているということである　もしこの法則が理解できていなければ、それは向煩悩滅尽多学男と呼べないのである

ところで、オウム真理教においても、同しように説法体系のすべてを理解した者を向煩悩滅尽多学男と呼んでいる　これは、ただ単に出家しただけでは、向煩悩滅尽多学男と呼べないのである

では、この向煩悩滅尽多学男と出家修行者の違いは何であろうか　まず、出家修行者はサマナという　そして、この出家修行者の中で、これらの九つの経典群についてしっかりと理解している者、これを向煩悩滅尽多学男と呼ぶのである

そして、この九部は、パーリ仏典のものすごい量の経典があるわけだが、それをこの九つに分類することができるということを表わしているのである

◉話の意義の理解

彼はまさに、それぞれの話の意義をわかっている。これが意義の分析といわれるのである。

次に、真理勝者が説かれた話の意味合い、これを理解すること、これを意味合いの分析、つまり意義の分析というのである。

◉五感の精通

どのような種々の法則が、善であるか

「視覚の領域である色の心を生じ、幸福と共にあり、知識と結びつき、形状存在の対象の固定があり、あるいは音の対象の固定があり、あるいは香りの対象の固定があり、あるいは味の対象の固定があり、あるいは接触の対象の固定があり、それぞれに着手するとき、そのとき、接触があり、……（略）……平穏がある。これらの法則が善である。これらの法則における精通が、それらの分析である。これらの結果における精通が、意義の分析である」

ここで表現されていることは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、これらについて、ここからどのような形で対象が固定され、そして安らぎに至るのかということについて、この分析は説いている。

そして、「これらの法則は善である」といっているのは、これはどういうことかというと、これらの法則、そこにとらわれることそのものが善、つまり喜びであるといっているわけである。そして、これらの法則に精通すること、イコール法則を分析することなのである。

そして、これらにとらわれた結果というものがある。その現象の意味合い、結果、これをしっかりと分析すること、これが現象の意味合いの分析ということになる。

◉精通による分別

このように同様に、分別して実感させるのである。

そして、この分析から生じる精通、これによってこれは利益になる、これは利益にならないということを分別して、そして「実感させる」ということを、ここではいっているのである。

◉言葉による検討の分析

[illegible]

まず「言葉による検討の討論における精通」とはどのようなことか日本語になるが、要約すると、言葉によって例えば一人、あるいは多数の者が検討し、

そしてそれを討論する　そしてそれによって、その法則やあるいは現象の意味合い、意義といったようなものを正確に分析する　そして、その正確に分析することこそが、現象を理解する上において、最適な方法ということを意味しているのである。

そして、現に修行の中にグルとの討論というのが存在している　つまり、理解できないことはグルに聞き、グルがその理解できない部分を正確に教えるという役目を果たしているのである

そして、このことから、それぞれが心の中に有している精通、これを共同のものとして引っ張り出し、そして定義する。これによってのみ、失敗のない定義ができるということなのである。

例えば例を挙げよう　ある人がある体験をした。それは、とのステージに当たるのか　これは言葉によって、その体験を表現する以外に方法はない　そこで、その人より、より高い経験をしている人がそこにいて、「あなたのこの経験は、

その前にこういう状態があったんじゃないか」、あるいは「今このような状態になろうとしているんじゃないか」という確認をする。すると、その人はまさにそのとおりであるならば、その人はそのステージに到達したことを表わしているし、そうじゃなければ別の状態を表わしているのである。

つまり、言葉によって失敗のない定義を生じさせるというのは、そのようなことなのである。

◉神聖な言葉による分析

それが検討され、説かれ、発せられるとき、その話、口を利いたこと、発せられたことを聞き、「これは状態を有している言葉による検討である　これは状態を有している言葉による検討ではない」と、このようにその熟知された法則の言葉による検討であり、状態を有している言葉による検討であり、すべての生命体の根本語であるマガダ（太陽の祭司のいる）に属する言葉を細分することに至った精通は、言葉による検討の分析である

「それが検討され、説かれ、発せられる」というのは、先程も述べたとおり、まずその状態をしっかりと検討する。例えば先程いったとおり、「あなたはその前にこういう体験をしてるかどうか」、あるいは「その体験と同時に、このような体験をしているんじゃないか」というような形で検討される。そして、その内容の全貌というのが説かれる。つまり、完全な形で理解される。そして、それが言葉として発せられるのである。

「熟知された法則の言葉による検討」、これは先程も述べたとおり、よりステージの高い者が、言葉によってその人の状態を検討することを表わしているのである。つまり、もし先程の例に述べたとおり、あるステージを経験していなければ、それは言葉による状態の検討とはいえないし、もしそうであるならば、言葉による状態の検討といえるということを言い換えているのである。

そして、太陽の祭司が存在しているものに属する言葉、つまり最も神聖な言葉によって、この分析がなされるということをいっている。

つまり、言葉の検討による分析とは、マガダ語を細分化し、精通することである。そして、マガダ語を細分化し、それに精通するということは、状態を有している言葉を検討することを意味しているのである。つまり、要するに、マカタ語を徹底的に細分化し、それを検討し、分析しなさいよということをいっているのである。

◉瞑想して発される言葉

[illegible]

これは大変興味深い

つまり、前者の「接触は、感覚は」と、すべての十二の条件生起の段階にのっとって発される言葉については、この対象の発している言葉は、状態を有している言葉の検討である、つまりしっかりと瞑想して言葉を発しているということを表わしており、逆に「接触の感覚は」などという言葉を聞くと、この人はしっかりと瞑想しないで言葉を発しているんだということに気づくということをいっているのである　つまり、後者は曖昧にしているということをいっているのである。

◉会得の分析

種々の精通における精通とは、あらゆる場所で精通を対象の固定となし、考察することによって、精通を対象の固定とする精通であり、あるいは前記のような、それらの精通における思考範囲の限定やなされるべきことなどを伴うことによって、精通という精通であり、会得の分析にあるという意義である

ここでいう会得とは達成である。そして、ここは大変わたしにとってわかりやすい文章なのである。

つまり、諸現象に対して、一つ一つの現象を正確に固定し、そしてそれに対して分析する。分析によって精通が生じる　これは、いかなる場所においても、いかなる時においても、しっかりと対象を分析し、そして精通に至る。しかも、例えばその静慮、熟考に入るとき、当然対象を固定化するわけであるが、そのときに必ず思索範囲の限定というものが必要になってくる。

では、この思索範囲の限定とは何を意味しているのか　それは、教義を背景として思索をしなさいということを、ここではいっているのである　そして、それによって、すべてを会得することができるといっているのである

◉真理勝者の四つの分析

そして、これらの四つ、これが真理勝者の四つの分析といわれている。

では、もう一度簡単に説明するならば、第一は意義、つまり現象の意味合いの分析である。第二番目は法則、つまり条件の分析である。第三番目は言葉による検討の分析である。そして、第四番目は会得の分析である。これら四つの分析が達成できている者、これこそが真理勝者なのである。

五、六つの証智

◉六つの証智

六つの証智　これは六つの神通に同じである

では、なぜ証智というのであろうか　これは第一禅定から始まり、第四禅定まで達成した者が必ず明かさなければならない、つまり証明しなければならない智慧のことなのである　つまり、この六神通の生じていない者は、第四禅定まで到達してないことを意味しているのである。

六、六つの覚者の法則

◉六つの覚者の法則

まず、この身の要素の蓄積は精通に費やされる

また、言葉の要素の蓄積は精通に費やされる

また、この意識の要素の蓄積は精通に費やされる

過去において、覚者世尊の苦しみから解放する精通がある

未来において、覚者世尊の苦しみから解放する精通がある

現在において、覚者世尊の苦しみから解放する精通がある

◉身の精通

次は、六つの覚者の法則である

覚者の六つの法則とは、まず身において、この身をしっかりと観察する。そし

て、それによって精通を生じさせる

では、この身とは何であろうか、これは粗雑な四大元素の集まり、つまり地・水・火・風の集まりであると見るということなのである

では、この地・水・火・風とはどのようなことであろうか　それは、地イコール固体成分、つまりこの肉、骨などがそれに当たる　水イコール体液成分、つまり血液、精液、あるいはリンパ液等がこれに当たる　火イコール熱成分、つまりこれは体温を司っているいろいろなもの、例えば消化の炎などがこれに当たる　そして第四番目が風成分、これは呼吸である　これらの四大元素を根本として、この肉体を、この身を正確に観察する　つまり、医者的な観察をする　これが第一番目の条件なのである。

◉言葉の精通

第二番目の条件は、言葉である　この言葉も同じように、どのような言葉を発

すればどのような結果が返ってくるか、これをしっかりと自分だけではなく、周りの人の言葉の因と果について精通すること、これが覚者の第二番目の精通なのである。

◉意識の精通

覚者の第三番目の精通とは何であろうか、これは意識についてである。この意識についても同じように、どのような意識を生じさせれば、どのような世界に転生するだとか、あるいはどのような意識を生じさせればどのような世界を形成するだとかということに対する精通を有している、これが覚者の第三番目の条件なのである。

◉過去における覚者世尊の精通

では、第四番目の条件とは何であろうか

ここで、はっきりと覚者と世尊とか分類されている　つまり、覚者とは覚者世尊の教えを信奉する、悟れる魂を表わしているのである　よって、ここで過去世における覚者世尊の苦しみから解放する精通に対して熟通する

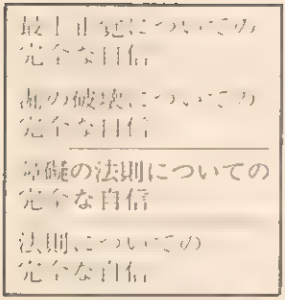
◉未来における覚者世尊の精通

そして、未来に生じるであろう覚者世尊の、同じように苦しみから解放する教えに対して精通する

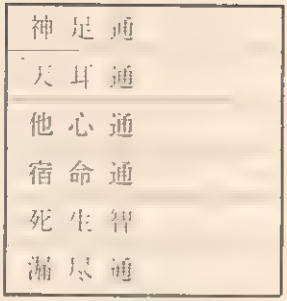
◉現在における覚者世尊の精通

三番目は、現在生きていらっしゃる覚者世尊の苦しみから解放させる教えに対して、徹底的に精通する

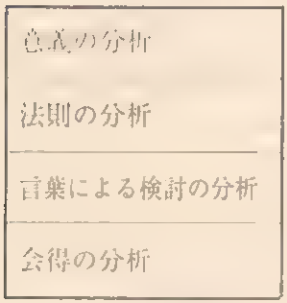
これか、覚者の六つの条件といわれるものなのである



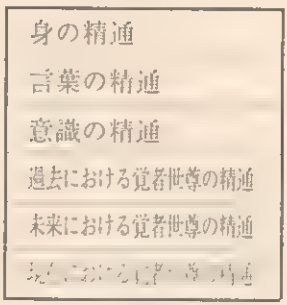
四つの完全な自信



六つの証智



四つの分析



六つの覚者の法則

十の真理勝者の能力（P75参照）

世尊はこれらの法則すべてを内在している

第二章

解脱への道程

一、四つの修行

◉真理の魂が実践しなければならない四つの修行

この真理の魂が実践しなければならない修行には、四段階ある。その第一段階は、善にのっとった修行である。第二段階は、功徳にのっとった修行である。第三段階は、寂静にのっとった修行である。第四段階は、法則にのっとった修行である。

では、これらの四つの修行について一つ一つ詳しく検討してみよう。

◉善にのっとった修行

まず、善にのっとった修行だが、この善にのっとった修行というのは、一般的にいういいことを指す。例えば、周りの人を安らかせてあげるとか、あるいは、

電車に乗っていて前におばあちゃんが立っててつらそうだったら席を替わってあげるとか、そういうことが善にのっとった修行に入るのである

そして、善にのっとった修行というのは、平行条件にある者、あるいは下の者に対する善行を指す　つまり、親に対する善行とか、あるいは子供に対する善行とかが、これに当たるのである。

◉功徳にのっとった修行

二番目は、功徳にのっとった修行である　この功徳にのっとった修行というのは、仏教的な所作の修行である

そして、この功徳にのっとった修行というのは、心の成熟の度合における上の者に対する功徳を指す　つまり、グルに対する布施や奉仕が、これに当たるのである

◉寂静にのっとった修行

次は、心を静めるための修行、これを寂静にのっとった修行という。例えば、経典を読んで心を静めるといった煩悩を静めていくことが、寂静にのっとった修行に入るのである。

そして、これによって透明な智慧、ちょうどそれは、鏡に映し出すような智慧を生じることができる　つまり、現象に対するはっきりとした認識が生じ、カルマの法則が理解できるのである

◉法則にのっとった修行

そして最後は、法則にのっとった修行である　これには、例えば瞑想とか、マントラを唱えるといったものが入るのである

では、休、この法則にのっとった修行は何のためになすのかといったら、わたしたちを苦しめるこの愛欲界から、完全に出離、そして自由に再生できるような

プロセスをつくり上げていくということにある。

そしてこれらは、善にのっとった修行、功徳にのっとった修行、寂静にのっとった修行、法則にのっとった修行の順で難しくなっていくのである。

二、十のきずな

◉十の転生の条件

十のきずな、五つの下位に結びつけるきずな、五つの上位に結びつけるきずな、これらはどの世界へ転生するかの条件を表わしたものである　よって、この条件をクリアすることこそが修行の目標となる

◉三つのきずな

では、まず三つのきずなから説明しよう

下位に結びつける三つのきずな、これは、有身謗見、疑念、戒禁のとらわれである　では、この有身謗見、疑念、戒禁のとらわれとは何であろうか

◉有身謬見

まず、有身謬見とは、「我が身これ我なり」という考え方である。つまり、「この身体こそわたしである」という考え方なのである。この考え方にとらわれると、必ず粗雑な愛欲界へ転生する。

◉疑念

疑念とは、真理に対して疑いを持つ心ということである。では、なぜ真理に対して疑いを持つことは、下位に結びつけるのであろうか。つまり、真理とは青い方を換えれば、上流、高い世界へ引き上げる教えということである。その教えに対して疑念を持つわけであるから、その魂は当然下向き、下向きに生きることとなり、結局は悪趣へと転生するのである。

◉戒誓のとらわれ

次は、戒誓のとらわれである。この戒誓のとらわれとは、真理の教えと反する教えの戒律に対してとらわれることを指す　あるいは、誓いに対してとらわれることを指す。これは、真理の教えではないものと強い縁を結ふことにより、その魂は低い世界へと転生するのである。

◉五つの下位に結びつけるきずな

では次に、下の世界へ結びつける五つのきずなである　これには、先程の三つに加えて、愛欲の興奮と、そして害心が加わる　ては、この愛欲の興奮と害心は、なぜ下の世界へ結びつける五つのきずなの中に入っているのだろうか。

◉愛欲の興奮

まず、愛欲の興奮。これは、動物の世界と人間の世界に生じるカルマなのである。つまり、人間世界以上の魂は、愛欲において興奮しないのである。よって、これは当然超えなければならない。

◉害心

第五番目の害心。この害心、人を傷つける心、これは間違いなく意識堕落大の心であり、これを修習することにより、自分自身の順調な能力の発達や智慧の発達が見られなくなる。よって、この害心も捨断しなければならないのである。

◉五つの下位に結びつけるきずなと転生

有身謬見にとらわれると、地獄に転生する。なぜ有身謬見が地獄ということになるのであろうか。地獄の魂を見ていただきたい。どれだけ苦しくても、そこで

死に、また生まれ変わる　必ず身を持つのである　これは、身に対するとらわれが最も強いからである　もちろん、これは地獄だけを表わしているわけではないしかし、身に対するとらわれが最も強い魂こそが、この地獄へ転生するのである。

疑念、イコールこれは当然無智と置き換えることができる　つまり、根本無智イコール、真理が理解できないわけである　よって、根本無智イコール、動物の世界へと転生するのである。

三番目、戒禁のとらわれ　この戒禁のとらわれによって、つまり正しくない宗教の教えを実践することによって、形状界へと転生する　しかし、この形状界は低位形状界であり、これは当然低級霊域と一致するのである　よって、戒禁のとらわれ、イコール餓鬼の世界へと転生するのである

愛欲の興奮　これは人間が必ず転生するときに見るヴィジョンである　必ず母親とのセックスや、あるいは父親とのセックスのヴィションを見る　そして、その興奮によって、人間の世界へと転生する　よって、愛欲の興奮は、人間世界の

転生の源となるのである。

害心、害心の背景にあるものは闘争本能、そして上を蹴落としたいと思う心である。これは、意識堕落天の根本的な心の状態である　よって、害心イコール意識堕落天への道なのである。

◉五つの上位に結びつけるきずな

次は、五つの上位に結びつけるきずなについて、一つ一つ説明しよう　この上位に結びつけるきずなも、さらに高い世界を目指す魂にとっては、障礙となるのである。

では、上位に結びつける五つのきずなとは何であろうか　その第一が形状愛著である。第二が非形状愛著である　第二番目が慢である　第四番目が興奮である　第五番目が非神秘力である

では、この五つの意味合いは何であろうか

◉形状愛著

まず、形状に対する愛著。これは当然形状界へと転生させ、そこで固定させる。

◉非形状愛著

第二番目の非形状愛著。これは非形状の世界へと転生させ、そこで固定させる

◉慢

第三番目の慢。これは、本来この三界には絶対的なもの、終わりというものがないのに、その慢が生じたがためにそこから抜け出せない、つまり上位の世界へは到達するが、そこから抜け出せないことを表わしている

五つの上位に結びつけるきずな	非神秘力	
	興奮	
	慢	
	非形状愛著	
	形状愛著	

五つの下位に結びつけるきずな	害心	意識堕落天
	愛欲の興奮	人間
三つのきずな	戒誓のとらわれ	餓鬼
	疑念	動物
	有身謬見	地獄

十のきずな

◉興奮

第四番目の興奮　これは、興奮をもししなければ現象を正しく見ることができるのに、興奮したがために現象を正しくとらえられない状態を表わしている　そして、そこでエネルギーが漏れる　しかし、この興奮できるということはエネルギーが強いのである。よって、これは第四番目に来る

◉非神秘力

第五番目の非神秘力　これは、もし神秘力があればすべての世界を見渡し、このすべての世界から離解脱することができるのに、非神秘力が存在しているかために、この世界から抜け出すことができない

よって、この五つを上位に結びつける五つのきずなというのである

二、解脱へ至る四つの実践

◉向煩悩滅尽多学男が解脱へ至る四つの実践

向煩悩滅尽多学男は、四つの実践を絶えず行なわなければならない　この四つの実践とは何であろうか　第一番目が証智である　第二番目が捨断である　第三番目が現証である　第四番目が修習である

では、この証智、捨断、現証、修習とは何であろうか

◉証智

証智とは、自分自身の煩悩のけがれを、身の行為、言葉、心の働きによって証し知ることである　では、具体的には、何を証知しなければならないのであろうか　それは、五つのとらわれの集積である

◉五つのとらわれの集積

五つのとらわれの集積とは何であろうか　それは、形状・容姿のとらわれの集積、感覚のとらわれの集積、表象のとらわれの集積、経験の構成のとらわれの集積、識別のとらわれの集積のことである

◉形状・容姿のとらわれの集積

まず、わたしたちがとらわれる第一は、形状・容姿である

形状・容姿というのは、例えばスタイルがいい、ハンサムだ、あるいはグラマーであるといったようなものの見方、これが形状・容姿に対するとらわれである

しかし、この形状・容姿は無常である　いかにハンサムな人でも、年を取ればハンサムでなくなるし、あるいは、いかにグラマーな人でも、年を取れば身体はたるんでくる　あるいは、いかに筋肉質の人でも、年を取ればやはりたるんでくる　あるいは、いかにスリムであったとしても、年を取ればしわができる　これ

は現実である。

だからまず、第一番目の形状・容姿のとらわれ、これは、結果的には無常を根本とする苦しみであるから、それを捨断した方がよいのである。

◉感覚のとらわれの集積

では、第二番目の感覚である。これは、例えば麻酔を打つならば、いい感覚もなくなる代わりに悪い感覚もなくなる、痛みがなくなる代わり、気持ち良さもなくなる、逆に感覚を鋭くするならば、いい感覚も増大する代わり、悪い感覚も増大する。

つまり、この苦しみ・楽・不苦不楽の三つの感覚というものは、結果的にはセットでしかわたしたちは感じることができない　よって、これに対してとらわれること、そしてこれを求めることは、そのセット、つまり苦しみ・楽・不苦不楽という三つの感覚を同時に受けなければならないわけだから、やはり捨断する方が

よい。

これが、第二段階の感覚に対する、しっかりと理解することと、証智をすることなのである。

◉表象のとらわれの集積

では、第三番目の表象　この表象というのはイメージである

このイメージは、わたしたちに肉体的悪業を積ませないで、いろんな経験をさせてくれる　例えば異力のシーン、例えばセックスのシーン、例えばグルメのシーンと　これは、目で見る喜びという形で、この現代の日本では、大いに称賛されている　しかし、このけがれなるがゆえに、わたしたちは、心の傾向というものを一つの方向に向けられてしまう

それはちょうど、動物における学習と同じである　この動物における学習とは何かというと、ここに犬を用意して、その犬に食事を出す　そのとき必ずベルを

鳴らす　しまいには食事を出さなくても、ベルを鳴らすだけでよだれが出てくる。

これと同じように、例えば異性を見たら、心をお互いに磨き上げる対象として見るのではなく、性的な対象としか見られなくなる　例えば、お金イコール美しい衣服を買う、あるいはおいしい食べ物を食べるといった、パターン化された心しか持てなくなってしまう。

ということは、この表象、イメージというものは、対象に対して正確に理解させるものではないといえる　そこで、この表象というものは、実際のところ、わたしたちに正確に対象を理解させるための条件を与えてくれるものではなく、苦しめるものであると、誤謬見解を抱かせるものであるということを証智しなければならない。

◉経験の構成のとらわれの集積

では、次は経験の構成　この経験の構成というものは、経験というふうにとら

えてもいいかもしれない。

経験というのは、それをなすことによって、一つの結果をなすことはできるかもしれない。しかし、その経験にとらわれることによって、それより発展したものについては、とらえることができない。逆に、その発展的なものの考え方というのを遮断することになるのである。

例えば、その典型的な例が、アインシュタインの登場である。アインシュタインが登場したとき、その当時の教授陣は、アインシュタインの理論に対して、反発した。そういうことはあり得ないと　つまり、教授というのは、その経験を土台として教えている。ということは、その経験が、逆の言い方をすれば、固定的な観念になっているから、アインシュタインの理論がわからなかったわけである。

つまり、このような形で、経験というものも、わたしたちに絶対的な幸福を与えるものではないということを証明しなければならないのである。

◉識別のとらわれの集積

では、次は識別である。

例えば、「これは赤である。これは白である」と、わたしたちは言葉によって識別することができる。しかし、例えば、犬の鳴き声を日本ではどういうかというと、これは「ワンワン」という。では、アメリカではどういうかというと、「バウワウ」である。それでは、アメリカの犬と日本の犬は、違った鳴き方をしているのか、違ったほえ方をしているのかと、これは一緒である。

このように識別というものも、つまり、何かと何か、何かから何かを区別しようとする意識というものは、正確な印象をわたしたちに与えるわけではないのである。つまり、「はい、犬はバウワウというのよ」、あるいは「犬はワンワンというのよ」と。これを聞いてると、ある人はバウワウということで、バウワウと聞こえてしまう。ワンワンと聞いてる人は、ワンワンと聞こえてしまう。これが、識別の恐怖である。

◉五つのとらわれの集積に対する証智

ということは、この五つのとらわれの集積に対してしっかりと証智し、これに対してとらわれなくしていくことが、修行の目標となってくるのである

◉捨断

そして、この証智をなしたならば、次の段階で捨断しなければならない　捨断とは、身の行為、言葉、心の働きのけがれを、自己の本質と見ないで捨て断つことである。

では、わたしたちが捨断しなければならないものとは、何であろうか　それは、非神秘力と生存渇愛（かつあい）である

◉非神秘力

では、まず非神秘力とは何か　非神秘力とは、要するに現実である。わたしたちが「これはこうなんだ」「これが現実なんだ」「これはこうでなければならない」という、このようなすべての断定的なものの考え方、断定的な行動、断定的な言葉、これらすべてが非神秘力なのである

例えば、「あの人は金持ちだから幸福だ」と考えたとしよう　しかし、いくらお金があっても、無常感というのはつきまとう　実際問題として、無常を超えない限り幸福ではないのである　例えば、大金持ちであればあるほど、死ぬときの、その金から離れる苦しみというのは大きい

こういうことからわかるとおり、要するに、非神秘力というのは、この世界に限定させる意識状態をつくり上げるものなのである

では、それはなぜかというと、要するに光がないからである。つまり、この世だけに意識が集中し、本来わたしたちの持っている光というのを発することがで

きないのである。光を発することができれば、暗闇を照らし、この世だけではなく、いろんな世界を照らすことができるから、この世は固定的なものであるということが理解できる。

したがって、この非神秘力を捨断しなければならないのである。

◉生存渇愛

では、もう一つの生存渇愛とは何か　生存渇愛というのは、要するに欲求である。

例えば、断食をして空腹になったと、この空腹のときは、何でもいいから食べたいと考えないだろうか。あるいは、性欲の煩悩に振り回されてると、だれでもいいからお付き合いをしたいと考えるだろう。あるいは、寂しいときには、だれでもいいから話をしたいと考えるだろう。これが生存渇愛なのである。

よって、そういう生存渇愛の出るような修行を禁止する。これが仏教的見地な

のである。つまり、生存渇愛が生じるがゆえに、そこから欲求する。欲求するがゆえに、そこから正しくないものを追い求める。だから、捨断しなければならないのである。

◉現証

では、この非神秘力と渇愛を捨断したならば、次は現証しなければならない。そして、現証しなければならないもの、この世界に証明し体現しなければならないもの、それが神秘力と離解脱なのである

◉神秘力

この神秘力とは何であろうか。

まず、わたしたちが神足通（じんそくつう）を経験することにより、この身体だけがわたしたちの身体ではないんだということがわかる。よって、この人間の世界だけではなく、

つまり他の多くの世界があるんだということを経験させてくれる神足通。

次に、この人間の世界だけではなく、神々の世界があり、そこは声によって交信できるという天耳通　そして、その人たちを司っているのは心であることを理解するための他心通。そして、前生を知ることのできる宿命通　そして、カルマによって、どの世界へ至るかということをしっかりと理解することのできる死生智。そして最後は、すべてをしっかりと、五つのとらわれの集積の形成を含めて知ることのできる、全智となるための漏尽通

これらの六つの神秘力を得ること、それを実際に経験すること、これがわたしたちが今生でなさなければならないことである

◉離解脱

そして、もう一つは離解脱である　つまり、そこに欲求の対象があったとしても、そこから全く離れた境地でいられること、それによって苦しみが完全に止滅

し、止滅することによって安楽でいられること、これをこの世で経験しなければならない。この世で実際に体験しなければはならない　これが、三番目の現証の段階なのである。

◉修習

そして、四番目は修習である　修習とは、正確な修行法を習い、それを繰り返し実践することである　では、修習しなければならないものとは何か　それは、寂止と正観である

◉寂止

寂止とは何であろうか　これは、心を平静、絶対に動じない状態にすることである。

では、なぜ心が動じるのかというと、それは五つのとらわれの集積によって動

じるのである。だから、最終的には、その五つのとらわれの集積の一つ一つを煩悩破壊していく以外にないことになる

◉正観

では、正観とは何かというと、対象に対して正確に認識することであるといえる

例えば、人間とは何か　例えば、対象に対して、ハンサムだな、あるいは、美しいな、グラマーだな、スタイルがいいな等々の言葉が来るけれども、これは正しくない。

人間とは何か　ます、表皮があって、真皮があって、脂肪があって、筋肉があって、腱があって、骨があって、内臓があって、脳があって、云々と、こういうことを探求する。そして、探求することによって、それらのものが無常であるレ無常であるがゆえに、そこから超越するということになる

四つの実践	対象となるもの
証　智	五つのとらわれの集積 ・形状-容姿のとらわれの集積 ・感覚のとらわれの集積 ・表象のとらわれの集積 ・経験の構成のとらわれの集積 ・識別のとらわれの集積
捨　断	非神秘力・生存渇愛
現　証	神秘力・離解脱
修　習	寂止・正観

解脱へ至る四つの実践

このように、いろいろな現象に対して正しく観察すること、これが正観なのである。

◉大完全煩悩破壊界へ至る四つの実践

五つのとらわれの集積における証智、非神秘力と生存渇愛に対する捨断、神秘力と離脱に対する現証、そして寂止と正観に対する修習、これらの四つがかりとなされるならば、わたしたちは間違いなく神になり、神を超え、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の偉大なる完全煩悩破壊界、あるいは大完全煩悩破壊界、あるいは大到達真智完全煩悩破壊界へと至ることができるのである

四、覚者の段階

◉覚者の段階

覚者には心の段階がある　それを順に表現すると、現世否定、離愛者、滅尽、寂静、証智、正覚、煩悩破壊である

◉現世否定

では、現世否定とは何であろうか　この現実の世界をまず否定しなければ、この現実の世界から離れることができない　よって、この現実の世界を否定するのである。

◉離愛著

しかし、わたしたちの心には、あるいは言葉の習性には、行為には、愛着が存在している　愛着とは、わたしたちがどうしてもそのような方向へ向かうことを表わしている　例えば、ここにラーメン屋、そば屋、カレー屋があったとして、もしカレーがラーメンやそばよりも抜きん出て好きであるならば、必ずカレー屋に入るであろう　これが愛着なのである

そして、この離愛着というのは、このような愛着を離れる　離れることによって、対象を正確に見つめることを主眼としている

よって、この愛着を離れるために、次は一つ一つの煩悩について、それを弱めることができる　そして、弱めるために、心は寂静となる　つまり、とらわれない心が生じるわけである

◉滅尽

そして、今生で培ったいろいろなデータを完全に止めてしまう。これが次の滅尽である。

◉寂静

そして滅尽した段階で、その人は第一静慮から第四静慮へと到達する。そして、第四静慮の段階で寂静に至るのである。

◉証智

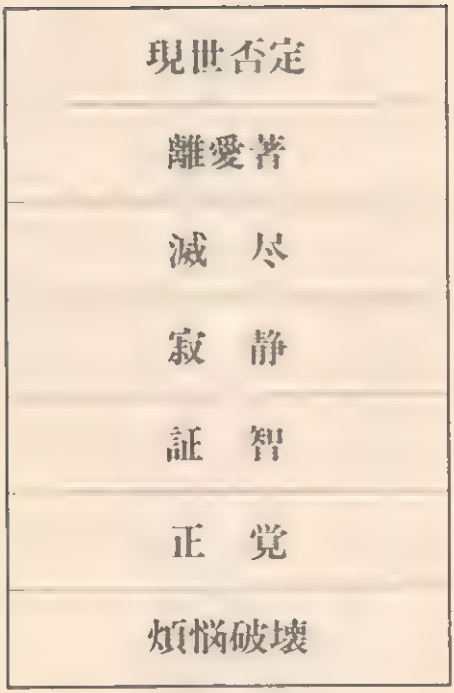
そして、寂静に至った魂は、次に証智の段階に入る。つまり、六神通を経験するわけである。

◉正覚

そして、最後の六神通の漏尽の段階で、正覚へと到達する。

◉煩悩破壊

そして、その正覚へと到達した段階で、何をなせば煩悩破壊できるのかをはっきりと理解する　これが覚者の段階なのである



覚者の段階

五、向煩悩滅尽多学男の五つの具足

◉向煩悩滅尽多学男の五つの具足

向煩悩滅尽多学男の五つの具足。向煩悩滅尽多学男は、五つのものを具足しなければならない。それは、戒、サマディ、智慧、離解脱、離解脱精通見解である。では、この五つとは何であろうか。

◉戒

まず第一は戒である。この戒により、堕落したわたしたちの心、言葉、そして行為をコントロールする。これが第一番目である。

◉サマディ

次は、それによりサマディへと入り、高い世界の経験を始める。これが第二段階である。

◉智慧

第二段階では、それによって、いろいろな高い世界の神秘的な体験を始めるこれが第三番目の智慧である

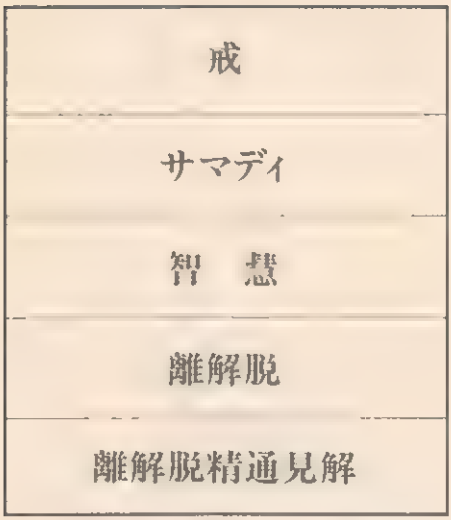
◉離解脱

そして第四番目は、その智慧の最終地点において、漏尽精通智に至り、離解脱へと至る。

◉離解脱精通見解

そして、離解脱したがために、いろいろな真理を具足できる　つまり、離解脱精通見解がそこで生じるわけである

そして、これら五つのものを具足しているもの、これを覚者というのである



向煩悩滅尽多学男の五つの具足

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています　以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください　また、仏教・ヨーガの用語対比表も参考までに掲載しました

◆言語対比表

欲界▼愛欲界
無間地獄▼超期間激苦地獄
叫喚地獄▼号叫激苦地獄
鉢特摩地獄▼紅蓮華のような状態になる激苦地獄
阿修羅▼不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天▼戯れ中落天
地居天▼地上愛欲神天
四天王衆天▼四大王天
持国天▼堅固王国天
増長天▼成長天
広目天▼統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天▼守護民外傷天
夜叉▼大食い鬼神
切利天▼三十三天
帝釈天▼有能神
夜摩天▼支配流転衆生児天
闇魔王▼支配流転衆生児王
兜率天▼除冷涙天
楽変化天、化楽天▼創造満足天

他化自在天 ▼為他神以神通創造欲望満足従事天

悪魔 ▼破滅天

色界 ▼形状界

梵天 ▼神聖天

梵衆天 ▼神聖衆愛欲神天

梵輔天 ▼神聖臣天

大梵天 ▼大神聖天

浄天 ▼美天

遍浄天 ▼絶美愛欲本質神天

広果天 ▼偉大果報愛欲本質神天

浄居天 ▼清潔居住天

無煩天 ▼超空間愛欲神天

無熱天 ▼超燃焼愛欲神天

善現天 ▼善安楽愛欲神天

善見天 ▼善現象愛欲神天

色究竟天 ▼超越童子愛欲本質神天

無色界 ▼非形状界

空無辺処 ▼空間無辺境

識無辺処 ▼識別無辺境

無所有処 ▼無所有境

非想非非想処 ▼非認知非非可認知境

想受滅 ▼認知経験滅

須弥山 ▼完全無欠山
東勝身洲 ▼東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮提 ▼南のハラリンゴの大陸
西牛貨洲 ▼西の願いかかなう牛の大陸
北倶盧洲 ▼北の悪しき音の大陸
成劫 ▼再生期
住劫 ▼存続期
壊劫 ▼滅亡期
釈迦牟尼 ▼サキャ神賢
如来 ▼真理勝者
応供 ▼供養値魂
正等覚 ▼最上正覚者
明行足 ▼智徳成就者

善逝 ▼最上善逝
世間解 ▼世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫 ▼丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀 ▼覚者
世尊 ▼世尊（変更なし）
菩薩 ▼求道真智運命魂
比丘 ▼向煩悩滅尽多学男
比丘尼 ▼向煩悩滅尽多学女
優婆塞 ▼帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽 ▼出家教団
長老 ▼高弟

声聞▼多学の弟子
沙門▼出家修行者
沙弥▼少年出家者
遊行者▼托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ▼奴隷

四双八輩▼四対の人々＝八つの宗教的、性を持つ人々

預流▼真理の流れに入ること
一来▼（愛欲界に）一度だけ再生すること

不還▼不還（変更なし）
阿羅漢▼供養値魂

四預流支▼四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦▼苦しみの絶対的真理
集聖諦▼苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦▼苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦▼苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四正断▼正断・正勤
断断▼現在悪業断
律儀断▼未来悪業断
修断▼現在善業勤
随護断▼未来善業勤

四如意足▼四つの如意の基礎
欲如意足▼決意如意の基礎
精進如意足▼精進如意の基礎
心如意足▼思念如意の基礎
観如意足▼観慧如意の基礎

五根▼五つの潜在性
信根▼信の潜在性
精進根▼精進の潜在性
念根▼記憶修習の潜在性
定根▼サマディの潜在性
慧根▼智慧の潜在性

五力▼五つの能力
信力▼信の能力
精進力▼精進の能力
念力▼記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力▼智慧の能力

七覚支 ▼七つの覚醒段階
念覚支 ▼記憶修習覚醒段階
択法覚支 ▼検討覚醒段階
精進覚支 ▼精進覚醒段階
喜覚支 ▼喜覚醒段階
軽安覚支 ▼静寂覚醒段階
定覚支→サマディ覚醒段階
捨覚支 ▼無頓着覚醒段階

八正道 ▼聖なる八段階の道
正見 ▼正見解
正思惟 ▼正思惟（変更なし）
正語 ▼正語（変更なし）
正業 ▼正行為
正命 ▼正生活
正精進 ▼正奮闘
正念 ▼正記憶修習
正定 ▼正サマディ

三苦→三つの苦しみ
苦苦→苦苦（変更なし）
行苦▼悪い構成要素の苦しみ
壊苦▼悪化の苦しみ

三受▼三つの感覚
楽受▼楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受▼不苦不楽の感覚

四無量心▼四無量心（変更なし）
慈▼慈愛
悲▼聖哀れみ
喜▼聖称賛
捨▼聖無執着

五取蘊▼五つのとらわれの集積
色取蘊▼形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊▼感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積
行取蘊▼経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋▼愛欲の興奮による障害
瞋恚蓋▼害心による障害
惛眠蓋▼頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋▼興奮と後悔による障害
疑蓋▼疑念による障害

九妙欲▼五つの愛欲の構成部分
色▼形状、容姿
声▼声（変更なし）
香▼香り
味→味（変更なし）
触▼接触

五下分結▼五つの下位に結びつけるきずな
有身見▼有身、邪見
疑→疑念
戒禁取▼戒禁のとらわれ
貪欲→愛欲の興奮
瞋恚▼害心

五上分結▼五つの上位に結びつけるきずな
色貪▼形状愛着
無色貪▼非形状愛着
慢▼慢（変更なし）
掉挙▼興奮
無明▼非神秘力

八解脱▼八離解脱
八勝処→八勝境
十遍処▼十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法▼十二の条件生起の段階
無明▼非神秘力
行▼経験の構成
識▼識別
名色▼心の要素・形状・容姿
六処▼六つの感覚要素と対象
触▼接触
受▼感覚
愛▼渇愛
取▼とらわれ

有▼生存
生▼出生
苦▼苦しみ
信▼信（変更なし）
悦▼歓喜
喜▼喜（変更なし）
軽安▼静寂
楽▼楽（変更なし）
三昧▼サマディ
如実知見▼如実情通見解
遠離▼現世否定
離貪▼離愛著
解脱▼離解脱

涅槃▼煩悩破壊
般涅槃▼完全煩悩破壊
中般涅槃▼中完全煩悩破壊
生般涅槃▼滅少完全煩悩破壊
無行般涅槃▼形状界にて経験の構成かなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃▼形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者▼一種者（変更なし）
家家者▼徳の高い家から家へと転生する者
極七返▼最高七回流転者

正智▼正精通
正解脱▼正離解脱
心解脱▼心の離解脱
慧解脱▼智慧の離解脱
殺生▼殺生（変更なし）
偸盗▼窃盗
邪淫▼愛欲における邪悪な行為
妄語▼虚言
綺語▼軽薄語
悪口▼悪口（変更なし）
両舌▼中傷
貪▼愛着
瞋▼邪悪心
癡▼迷妄

愁▼不運な出来事
悲▼悲嘆
苦▼苦しみ
憂▼歎痛
悩▼悩み

五趣▼五つの方向
善趣▼幸福に向かうこと
悪趣▼悲痛に向かうこと

カルマ▼業の蓄積
法▼法則
梵行▼神聖行
布薩▼戒律行
波羅提木叉▼約束維持解放

頭陀▼断修行障礙
袈裟衣▼赤っぽい黄色の衣
衆生▼生命体
四大種▼四大元素
本生経▼輪廻転生

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

《め》
瞑想の結果を理解する能力 68
滅尽 149,151

《よ》
要素の蓄積の結果を理解する能力 62
四つの完全な自信 58,76
四つの修行 120
四つの分析 58,81,85,111
四対の人々
八つの宗教的特性を持つ人々 23

《ら》
楽 135

《り》
離愛著 149,150
離解脱 69,143,144,148,154,155,156
離解脱精通見解 154,156
良心 52,53,54
良心の能力 52
輪廻転生 29,37

《ろ》
老化の精通 97
六神通 44,112,151,152
漏尽通 74,144
漏尽精通智 155
漏の破壊 77

《に》
人間 28,30,31,34,46,47,58,77,78,93,127,128,144,146
人間界 58,77
認知経験滅尽 41

《は》
パーリ仏典 101
バガヴァント 58
活の意義 102
破滅天 77,78,79,80
バルドー 27,28

《ひ》
非形状愛著 129,130
非形状界 26,41,58,59,64
非神秘力 129,132,140,141,142,143,148
ビック 101
表象 134,136,137

《ふ》
不苦不楽 135
不還 24,26
不純物 68,69
不純物の瞑想 69
布施 40
不善 91
奮闘努力 53

《ほ》
奉仕 40
法則 58,78,79,86,87,90,91,92,93,94,95,98,99,100,101,103,105,107,109,111,113,114,120,122,123
法則に従う者 31,32
法則にのっとった修行 37,120,122,123
法則の分析 90,93,94
煩悩 122,133,142,150
煩悩破壊 28,38,43,89,90,146,149,152
煩悩破壊界 27

《ま》
慢 129,130

《み》
三つのきずな 124
身の精通 113

《む》
無常 46,50,134,141,146
無上士 39,42
無智 128
六つの覚者の法則 58,113
六つの感覚要素と対象 96,99
六つの証智 58,112
六つの神秘力 144

真理勝者
53,37,38,41,47,[illegible]
62,64,65,66,74,77,78,80,[illegible]
真理勝者に至るための五つの能力 45
真理の流れに入ること 23
真理の法則 90

《せ》
生起のサマディ 70
生存 96,98
生存渇愛 140,142,143,148
精通
85,86,87,90,92,93,94,95,97,98,99,100,102,
[illegible]
聖なる道 91
生命体の傾向を理解する能力 65
世間解 39,42
世尊 39,44,58,59,60,74,115,116
接触 99,109
絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜 22,148
善 29,37,52,91,103,120,121,123
善住意識 66
全智 144
善にのっとった修行 29,37,120,121,123

《た》
大宇宙の法則 86
大完全煩悩破壊 27,28,29,34,36
大完全煩悩破壊界 27,148
大到達真智完全煩悩破壊界 148
多学 37,38
他心通 66,144
達成 87,110,111,112
他の深い意識状態を理解する能力 65

《ち》
[illegible]
智慧の能力 54
智徳成就者 39,41
中間状態 27,28
中完全煩悩破壊 27
超越童子天 29,41,46

《て》
低級霊域 128
天界 31,43,58,59
天耳通 144
天人師 39,43

《と》
到達真智運命魂 37
動物 127,128
独覚 37,38
徳 23,30,34,41,51
徳の高い家から家へと転生する者
23,30
とらわれ 98

サマディ 69,70,154,155
サマナ 101
三界 41,59,63,64,130
三界に至る方法を理解する能力 63
三界を完全に経験し尽くす能力 64
慚愧 51,52,53,54
慚愧の能力 51
三ゲナ 97
三宝 32

《し》

識別 99,134,139
地獄 31,127,128
思索範囲の限定 110
死生智 72,74,144
四大元素 114
寂止 145,148
寂静 37,51,54,120,122,123,149,150,151
寂静にのっとった修行 37,120,122,123
捨断 32,127,133,135,140,142,143,148
十三段階の救済計画 22,23
十二の条件生起の段階 93,109
十のきずな 124
十の真理勝者の能力 58,60,74
十の転生の条件 124
十の能力者 39
宿命通 70,74,144
修習 133,145,148
出家修行者 101
熟考 110
出罪 68,69,70
出罪の瞑想 69
出生 98
出離 122
正覚 149,152
正観 145,146,148
障礙 78
障礙の法則 78
条件の分析 111
精進 53,54
精進の能力 53
証智 58,112,133,136,137,138,140,148,149,151
丈夫調御者 39,43
上流 26,29,43,125
上流となり超越章子天へ至る 29
静慮 69,110,112,151
除冷淡天 30
真我 66,69,97
身・口・意 29,65
神聖世界 28,46
神聖天 60,61,77,78,79,80
神聖天の輪 60,61
神足通 143,144
信に従う者 23,32
信の能力 46
神秘力 143,144,148

功徳　28,29,37,40,54,120,121,123
功徳にのっとった修行
29,37,120,121,123
供養値魂　24,26,39,40,44
グル　105
苦しみ　46,51,92,93,94,116,135,141,144

《け》

経験の構成　99,100,134,137
経験の構成がある完全煩悩破壊　26,29
経験の構成がない完全煩悩破壊
26,28,34
経験の構成の精通　99
形状愛者　129,130
形状界
21,25,29,30,31,34,46,58,59,64,128,130
形状界にて経験の構成があり
真理の実践による完全煩悩破壊　29
形状界にて経験の構成がなく功徳の
果報を受けつつある完全煩悩破壊　28
形状-容姿　65,134,135
下向　125
化身　43
解脱　37,45,133
解脱へ至る四つの実践　133
結果の精通　95
原因と結果を見抜く能力　61
原因の精通　94
現証　133,143,145,148
現象化　51
滅少完全煩悩破壊　26,28
現世大煩悩破壊　26,27,34
現世否定　149

《こ》

向　24
行動　89,90
興奮　129,132
向煩悩滅尽多学男　100,101,133,154
向煩悩滅尽多学男女　37,38
向煩悩滅尽多学男の五つの具足　154
向煩悩滅尽多学男の条件　100
五感の精通　102
心の要素-形状-容姿　99
言葉による検討　104,107,111
言葉による検討の分析　104,111
言葉の精通　114
誤謬見解　137
根本無智　128

《さ》

最高七回流転者　31
最上正覚　76,77
最上正覚者　39,40
最上善逝　39,41
再生の法則　95
サキャ神賢　34
サハスラーラ・チャクラ　61

索　引

《あ》

愛著　96,150
愛欲界　24,30,64,122,125
愛欲界に一度だけ再生すること　23,24
愛欲界に一度だけ再生する魂　30
愛欲神　46,77,78,79,80
愛欲の興奮　126,127,128
悪趣　125
洗い清め　68,69,70
洗い清めの瞑想　69

《い》

意義　85,88,89,90,95,99,102,105,111
意義の分析　88,89,102
意識堕落天　127,129
意識の精通　115
一種者　23,24,30
五つの下位に結びつけるきずな　124,126,127
五つの上位に結びつけるきずな　124,129
五つのとらわれの集積　133,134,140,144,145,146,148

《う》

有身謬見　124,125,127

《え》

会得　109,110,111
会得の分析　109

《か》

戒　154
害心　126,127,129
戒誓のとらわれ　124,126,128
餓鬼　128
覚者　32,39,44,58,113,115,116,149,152,156
覚者の段階　149
渇愛　96,98
果報　23,24,26,28
カルマ　29,32,96
感覚　96,99,109,134,135,136
完全煩悩破壊　26,28,29,34
完全煩悩破壊界　148

《き》

帰依信男　33
帰依信女　33
疑念　124,125,128
究竟のサマディ　70

《く》

具足　154,156

dhammesu ñāṇaṃ atthapaṭisambhidā. Yamhā dhammā te dhammā vūtā bhūtā saṅjātā nibbattā abhinibbattā pātubhūtā tesu dhammesu ñāṇaṃ dhammapaṭisambhidā . . . Jarāmaraṇe ñāṇaṃ atthapaṭisambhidā. Jarāmaraṇasamudayañāṇaṃ dhammapaṭisambhidā . . . pe . . . saṅkhāranirodhe ñāṇaṃ atthapaṭisambhidā. Saṅkhāranirodhagāminiyā paṭipadāya ñāṇaṃ dhammapaṭisambhidā. . . . Idha bhikkhu dhammaṃ pāneti suttaṃ geyyaṃ . . . pe . . . vedallaṃ : ayaṃ vuccati dhammapaṭisambhidā. So tassa tass' eva bhāsitassa atthaṃ jānāti : ayaṃ imassa bhāsitassa attho ti : ayaṃ vuccati atthapaṭisambhidā. . . . Katame dhammā kusalā ? Yasmiṃ samaye kāmāvacaraṃ kusalaṃ cittaṃ uppannaṃ hoti . . . pe . . . ime dhammā kusalā : imesu dhammesu ñāṇaṃ dhammapaṭisambhidā. Tesaṃ vipāke ñāṇaṃ atthapaṭisambhidā ti[2] ādinā navena vibhajitvā dassito. *Tattha dhammaniruttābhilāpe*[3] *ñāṇaṃ* 'ti tasmiṃ atthe ca dhamme ca vā sabhāvaniruttī avyāhucārivohāro.[4] Tad-abhilāpe tassa bhāsane udirane taṃ bhāsitaṃ lapitaṃ udīritaṃ sutvā va: ayaṃ sabhāvaniruttī, ayaṃ na sabhāvaniruttī ti evaṃ tassā dhammaniruttisaññitāya sabhāvaniruttiyā Māgadhikāya sabbasattānaṃ mūlabhāsāya pabhedagataṃ ñāṇaṃ *niruttipaṭisambhidā*. Niruttipaṭisambhidāppatto hi phasso, vedanā ti evaṃ ādivacanaṃ sutvā ayaṃ sabhāvaniruttī ti jānāti. Phassavedanā ti evaṃ ādikaṃ pana ayaṃ na sabhāvaniruttī ti. *Ñāṇesu ñāṇaṃ* ti sabbattha ñāṇaṃ ārammaṇaṃ katvā paccavekkhantassa ñāṇārammaṇaṃ ñāṇaṃ yathāvuttesu vā tesu ñāṇesu sappurisūpanissayādivasena vitthārato ñāṇaṃ *paṭibhānapaṭisambhidā* ti attho.

VISUDDHI-MAGGO

NAMO TASSA BHAGAVATO ARAHATO SAMMĀ-SAMBUDDHASSA!

XIV

CATUDDASAMO PARICCHEDO

KHANDHA-NIDDESO

Dutiyacatukke catasso patisambhidā nāma atthādisu pabhedagatāni cattāri ñānāni. Vuttañ c' etaṃ: *atthe ñāṇaṃ atthapatisambhidā. Dhamme ñāṇaṃ dhammapatisambhidā. Tattha dhammaniruttābhilāpe*[1] *ñāṇaṃ niruttipatisambhidā. Ñāṇesu ñāṇaṃ pātibhānapatisambhidā* ti.[2] Tattha *attho* ti sankhepato hetuphalass' etam adhivacanam. Hetuphalam hi yasmā hetu-anusārena ariyati adhigamīyati sampāpuṇīyati, tasmā attho ti vuccati. Pabhedato pana: yaṃ kiñci paccayasambhūtam, nibbānaṃ, bhāsitattho, vipāko, kiriyā ti ime pañca dhammā attho ti veditabbā. Taṃ ettha paccavekkhantassa tasmiṃ atthe pabhedagataṃ ñāṇaṃ atthapatisambhidā. *Dhammo* ti pi sankhepato paccayass' etam adhivacanam.[3] Paccayo hi yasmā taṃ taṃ dahati, pavatteti vā sampāpunitum vā deti, tasmā dhammo ti vuccati. Pabhedato pana: yo koci phalanibbattako, hetu, ariyamaggo, bhāsitaṃ kusalaṃ, akusalan ti ime pañca dhammā dhammo ti veditabbo. Taṃ dhammaṃ paccavekkhantassa tasmiṃ dhamme pabhedagataṃ ñāṇaṃ dhammapatisambhidā. Evaṃ eva hi attho Abhidhamme *dukkhe ñāṇaṃ atthapatisambhidā. Dukkhasamudaye ñāṇaṃ dhammapatisambhidā. Heṭṭhimāhi ñāṇaṃ dhammapatisambhidā. Heṭṭhimato ñāṇaṃ atthapatisambhidā. Ye dhammā jātā bhūtā saṅkhatā uppannā pātubhūtā, imesu*

dhammā anabhisambuddha ti, tatra vata maṁ samaṇo vā brāhmaṇo va devo vā Maro vā Brahmā vā koci vā lokasmiṁ saha dhammena paṭicodessatīti nimittam-etaṁ Sāriputta na samanupassāmi. Etam p' ahaṁ Sāriputta nimittam asamanupassanto khemappatto abhayappatto vesārajjappatto viharāmi. Khīnāsavassa te paṭijānato ime āsavā aparikkhīnā ti, tatra vata mam .. na samanupassami. Etam p' ahaṁ ... viharami. Ye kho pana te antarāyikā dhamma vuttā te paṭisevato nālaṁ antarāyayāti, tatra vata mam ... na samanupassāmi. Etam p' ahaṁ ... viharāmi. Yassa kho pana te atthāya dhammo desito so na niyyāti takkarassa sammā dukkhakkhayāyāti, tatra vata maṁ samaṇo vā brāhmaṇo vā devo vā Maro vā Brahma vā koci vā lokasmiṁ saha dhammena paṭicodessatīti nimittam-etaṁ na samanupassāmi. Etam p' ahaṁ Sāriputta nimittam asamanupassanto khemappatto abhayappatto vesārajjappatto viharāmi.

Mahāsīhanādasuttaṁ dutiyaṁ

hassam · pi jātisatasahassam · pi, aneke pi samvattakappe aneke pi vivattakappe aneke pi samvattavivattakappe, amutr' asim evamnāmo evamgotto evamvanno evamāhāro evam sukhadukkhapatisamvedi evamayupariyanto, so tato cuto amutra udapādim, tatrāp' āsim evamnāmo evamgotto evamvanno evamāhāro evam sukhadukkhapatisamvedi evamāyupariyanto, so tato cuto idhūpapanno ti, iti sākāram sauddesam anekavihitam pubbenivāsam anussarati. Yam · pi Sāriputta . . . pavatteti. Puna ca param Sāriputta Tathāgato dibbena cakkhunā visuddhena atikkantamanusakena satte passati cavamāne upapajjamāne, hine panite suvanne dubbanne sugate duggate, yathākammūpage satte pajānāti: ime vata bhonto sattā kayaduccaritena samannāgata vacīduccaritena s. manoduccaritena s. ariyānam apavādakā micchādiṭṭhikā micchādiṭṭhikammasamādana, te kāyassa bhedā param · marana apayam duggatim vinipātam nirayam upapanna, ime vā pana bhonto sattā kayasucaritena samannāgata vacīsucaritena s. manosucaritena s. ariyanam anupavādaka sammādiṭṭhikā sammādiṭṭhikammasamādanā, te kāyassa bheda param · maranā sugatim saggam lokam upapannā ti, iti dibbena cakkhunā visuddhena atikkantamanusakena satte passati cavamāne upapajjamāne, hine panite suvanne dubbanne sugate duggate, yathākammupage satte pajānāti. Yam pi Sāriputta . . . pavatteti. Puna ca param Sāriputta Tathāgato āsavānam khaya anasavam cetovimuttim paññāvimuttim diṭṭhe va dhamme sayam abhiññā sacchikatvā upasampajja viharati. Yam pi Sariputta Tathagato āsavanam khayā anasavam cetovimuttim paññavimuttim diṭṭhe va dhamme sayam abhinna sacchikatva upasampajja viharati, idam pi Sariputta Tathagatassa Tathāgatabalam hoti yam balam agamma Tathagato āsabhan thanam patijānāti, parisasu sihanadam nadati, brahmacakkam pavatteti.

Cattār' imani Sariputta Tathāgatassa vesarajjani yehi vesarajjehi samannagato Tathāgato āsabhan · thānam patijanati, parisasu sihanādam nadati, brahmacakkam pavatteti, katamani cattāri · Sammasambuddhassa te patijanato ime

12.

Dasa kho pan' imani Sariputta Tathāgatassa Tathāgata-balani yehi balehi samannāgato Tathagato asabhaṃ thanaṃ patijanati, parisasu sihanadam nadati, brahmacakkam pavatteti, katamani dasa? Idha Sariputta Tathagato thanan ca ṭhanato aṭṭhanan ca atthanato yathabhutam pajanati. Yam pi Sariputta Tathagato thanan ca thanato atthanan ca aṭṭhānato yathabhutaṃ pajanati, idam pi Sariputta Tathāgatassa Tathagatabalam hoti yam balam agamma Tathāgato āsabhaṃ thanam patijānati, parisāsu sihanadam nadati, brahmacakkam pavatteti. Puna ca param Sāriputta Tathagato atitānāgatapaccuppannanam kammasamadanānam thanaso hetuso vipakam yathabhūtam pajanati. Yam pi Sariputta Tathāgato atitānāgatapaccuppannanam pavatteti. Puna ca param Sariputta Tathagato sabbatthagaminim patipadam yathabhutam pajanati. Yam pi Sariputta... pavatteti. Puna ca paraṃ Sariputta Tathagato anekadhatu-nānādhatu-lokaṃ yathabhutam pajanāti. Yam pi Sāriputta... pavatteti. Puna ca param Sariputta Tathagato sattanam nānadhimuttikatam yathabhutam pajanati. Yam pi Sariputta ... pavatteti. Puna ca param Sariputta Tathagato parasattanam parapuggalānam indriyaparopariyattim yathabhutam pajanati. Yam pi Sariputta... pavatteti. Puna ca param Sāriputta Tathagato jhāna-vimokha-samadhi-samapattinam sankilesam vodānam vutthanam yathabhutam pajanati. Yam pi Sāriputta... pavatteti. Puna ca param Sariputta Tathagato anekavihitam pubbenivāsam anussarati, seyyathidam ekam pi jātim dve pi jatiyo tisso pi jatiyo catasso pi jatiyo panca pi jātiyo dasa pi jatiyo visatim pi jatiyo timsam pi jatiyo cattarisam pi jātiyo pannasam pi jatiyo tisatam pi jatisa-

Te taṃ purisaṃ pāsādaṃ āropetvā pañca kāma-guṇāni upaṭṭhapeyyuṃ. Taṃ kiṃ maññasi Rājañña? Api nu tassa purisassa sunahātassa[2] suvilittassa kappita[3]-kesa-massussa āmutta-mālâbharaṇassa[4] odāta-vattha-vasanassa upari-pāsāda-vara-gatassa pañcahi kāmaguṇehi samappitassa samaṅgibhūtassa paricāriyamānassa[5] punad eva[6] tasmiṃ gūtha-kūpe nimmujjitukāmatā[7] assâti?'

'No h'idaṃ bho Kassapa.'

'Taṃ kissa hetu?'

'Asuci bho Kassapa gūtha-kūpo. asuci c'eva[8] asuci-saṃkhāto ca duggandho ca duggandha-saṃkhāto ca jegucchо ca jegucchа-saṃkhāto ca paṭikkūlo[9] ca paṭikkūla-saṃkhāto câti.

'Evaṃ eva kho Rājañña manussā devānaṃ asucī c'eva asuci-saṃkhatā ca duggandhā ca duggandha-saṃkhātā ca jegucchā ca jegucchа-saṃkhātā ca paṭikkūlā ca paṭikkūla-saṃkhātā ca. Yojana-sataṃ kho Rājañña manussa-gandho deve ubbāhati.[10] Kiṃ pana te mittâmaccā ñāti-sālohitā pāṇâtipātā paṭiviratā adinnâdānā paṭiviratā kāmesu micchâcārā paṭiviratā musā-vādā paṭiviratā pisuṇāya vācāya paṭiviratā pharusāya vācāya[11] paṭiviratā samphappalapā paṭiviratā anabhijjhālū avyāpanna-cittā sammā-diṭṭhī kāyassa bhedā paraṃ maraṇā sugatiṃ saggaṃ lokaṃ uppannā[12] āgantvā ārocessanti: "Iti pi atthi paraloko, atthi satta opapātikā, atthi sukaṭa-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko ti?" Imināpi kho te Rājañña pariyāyena evaṃ notu: Iti pi atthi paraloko, atthi satta opapātikā, atthi sukata-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko ti.'

[xxiii. Pāyasi Suttanta.]

9. "Tena hi Rājañña upamaṁ te karissāmi. Upamāya[1] pi idh' ekacce viññū purisā bhāsitassa atthaṁ ājānanti.[2] Seyyathā pi Rājañña puriso gutha-kupe sasīsako[3] nimuggo assa. Atha tvaṁ purise āṇāpeyyāsi: "Tena hi bho taṁ purisaṁ tamhā gūtha-kūpā uddharathāti." Te[4] "Sādhūti" paṭissuṇitvā taṁ purisaṁ tamhā gūtha-kūpā uddhareyyuṁ. Te tvaṁ evaṁ vadeyyāsi: "Tena hi bho tassa purisassa kāyā velu-pesikāhi gūthaṁ sunimmajjitaṁ nimmajjathāti." Te "Sādhūti" paṭissuṇitvā tassa purisassa kāyā velu-pesikāhi gūthaṁ sunimmajjitaṁ nimmajjeyyuṁ. Te tvaṁ evaṁ vadeyyāsi: "Tena hi bho tassa purisassa kāyaṁ paṇḍumattikāya[5] tikkhattuṁ subbaṭṭitaṁ[6] ubbaṭṭethāti."[7] Te[8] tassa purisassa kāyaṁ paṇḍumattikāya[9] tikkhattuṁ subbaṭṭitaṁ[10] ubbaṭṭeyyuṁ.[11] Te tvaṁ evaṁ vadeyyāsi: "Tena hi bho taṁ purisaṁ telena abbhañjitvā[12] sukhumena cuṇṇena tikkhattuṁ suppadhotaṁ karothāti." Te taṁ purisaṁ telena abbhañjitvā sukhumena cuṇṇena tikkhattuṁ suppadhotaṁ kareyyuṁ. Te tvaṁ evaṁ vadeyyāsi: "Tena hi bho tassa purisassa kesa-massuṁ kappethāti." Te tassa purisassa kesa-massuṁ kappeyyuṁ. Te tvaṁ evaṁ vadeyyāsi: "Tena hi bho[13] tassa purisassa mahagghañ ca mālaṁ mahagghañ ca vilepanaṁ mahagghāni ca vatthāni upaharathāti." Te tassa purisassa mahagghañ ca mālaṁ mahagghañ ca vilepanaṁ mahagghāni ca vatthāni upahareyyuṁ. Te tvaṁ evaṁ vadeyyāsi: "Tena hi bho taṁ purisaṁ pāsādaṁ āropetvā, pañca kāma-guṇāni upaṭṭhapethāti."[1]

本書に引用されている経典は、
このパーリ仏典を直接翻訳したものである。

❖参考資料

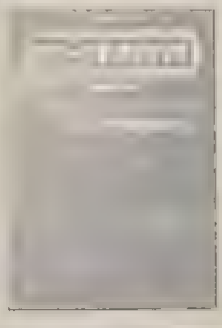
タターガタ・アビタンマ

麻原彰晃 著

真理解者 絶対最勝の法則

第一誦品

大宇宙の実相



麻原彰晃尊師の修行体験と原始仏教などをベースに確立されたオウム真理教の教義をやさしく教える待望のオウム真理教入門書第一弾。

オウム出版

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』

――主な内容――

◆Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて　えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」麻原彰晃尊師

◆JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

「えんじょい・はひねす　の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- 幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- 成就者との対面および電話による悩み相談。
- 各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はひねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊「えんじょい・はひねす　の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

至福の未来をあなたの手に

オウム真理教

AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。
日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。
素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか？

※資料請求券を貼付した八ガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

タターガタ・
アビダンマ2

資料請求券

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、"オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット"事務局
TEL 03-3335-4965

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『タターガタ・アビダンマ　第二誦品』読者係」までお送りください。

〒168　東京都杉並区宮前3-8-11
オウム出版『タターガタ・アビダンマ　第二誦品』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市宮場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区宇玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
（海外支部）
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

タターガタ・アビダンマ　第二誦品

一九九一年十二月二十八日　初版発行

定　価　五五〇円
著　者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二－一〇九三二五
落丁・乱丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1991
ISBN4 - 900497 - 99 - 1　C0014　P550E

タターガタ・アビダンマ

Tathāgata Abhidhamma 第1講座

ISBN4-900497-99-1 C0014 P550E 定価550円(本体534円)